

備中誌加陽郡卷之十一

板倉村

吉備國史同し

村名越後國頸城郡板倉

高三百四十六石云

板倉橋

正保改帳

幅

三間

廣五間

深二尺と有中昔ハ川幅も廣かりし

鼓山

板倉村の西幸田村と有

大伴會和歌集云

後一條院長和五年十一月主基備中國風俗

參入音聲 鼓山 賀陽郡

善滋爲政

打はへて萬代とのミ聞ゆるハ鼓の山の音にそありける

後三條院治曆四年十一月主基方備中國

前筑前守從五位下藤原朝臣經衡

名に高き鼓の山の音きけば御代をけるかに成まさりける

金葉集の和歌に云

大伴會主基方長日參音聲に鼓山をよめる

明治 37 5 4 丙午



藤原行盛

音九かき鼓の山の打はへてたのしき御代と成す嬉しき  
名勝考ニ云是ハ保安四年の度にて主基方本州なる事上村山の歌と彌高山の歌  
にてもしるし然るに類字名所和歌集に此歌を引き丹波の鼓山の歌とせるハ誤  
也

板倉城跡 府志云 城主陶山左衛門尉道勝妹尾兼康か旗下なり

盛衰記ニ壽永二年木曾義仲水島合戦源氏討負ぬと聞キ備中へ馳下る條に云去  
ル六月北國にて生捕たりし妹尾太郎兼康を先に立案内者とす船坂山にて播磨備前  
妹尾木曾を謀て御先へ参り馬の草をも用意せんと云木曾是をゆるす妹尾悦ん  
で則我を生捕し倉光三郎成氏を同道し備前和氣郡藤野村の古き御堂に落着又  
倉光をすかして爰に留置自身ハ先達て上道郡草壁村へ馳行親敷者共相催し夜  
半計に藤野村へ押寄倉光を討殺し夫より方々へ觸て人數を集め西川牟佐の渡  
りを越て福林寺阡を堀切て管植逆茂木引などして人馬通りかたく構へたり夫よ  
り備前の一ノ宮を行過て佐々が追りと云細道有此東西の山に弩多く張立たり  
後ハ津高の郷とて谷郷ハ沼也ければ究竟の城ニて是に兵數多簡置我身ハ備中

板倉の城ニ瀧る木曾是を聞さらばとて其曉三ツ石を立藤野寺を經て和氣の渡り  
を越へ可貞村へ打入福林寺阡ハ逆茂木等有て容易通りかたしとて惣官頼隆と  
いふ者を頼ミて間道を案内させ北地に付て鳥ヶ岳と云所を廻り佐々井より不  
意に攻かけければ敵兵散々に成て佐々が追りまて即時に攻落し幸川の宿より  
板倉城に押寄揉にもんで攻ければ兼康矢種の有程ころ防ぎけれ矢種盡ぬれば  
力及ばず我先にと落行ける兼康只主從三騎に打なされ板倉川のはたに付て緑  
山の方にテ落て行去ル五月盛衰記和氣新  
兩書を交へ取倉光三郎成氏が兄次郎成澄ハ兼康に弟を  
討せ安からずおもひ今度も又妹尾め生捕にしてくれんすと只一騎群に扱て追  
て行間壹町計に追付あわれいかに妹尾とて見れまきのふも敵に後ろを見す  
る者かな返せや々と詞をかけければ妹尾ハ板倉川を西へ渡し川中へひかへ  
て待かけたり倉光追付むつと組てとふと落互にかどらぬ大力なれば上上に成下  
に成轉ひ合けるが河岸の淵にころひ入ぬ倉光ハ水練なく妹尾ハ水に功者有け  
れば終に倉光討れける妹尾我馬ハ乗損し倉光が馬に打乗嫡子小太郎宗康と共  
に落たりしが荒手の源氏追來り散々に戦ふて主從三人ろこに討死をぞしたり  
ける



陶山道勝宮内に妹尾父子が首を葬りしといふ此條日畑村の所に併せ見るべし。

鼓山城趾

吉備集成志に加陽氏城主也と云

備中府志に此城を上足守宮地山城の事として寛平中加陽良藤寛治中加陽貞政世々吉備津宮の神官として大祝也昔吉備津彦命鼓をならし賤徒を征伐し給ひしより鼓山と云實なりや否や

板倉村 板倉郷

東備前國津高郡辛川村

南

西

北

名義詳ならず和名鈔板倉

伊多久良

中古宮内有木溪より吉野の地かけて惣て板倉村也し事慶長九年板倉村畝高改帳に高七百四石七斗四升四合と有て宮内村なしか、れば慶長寛永の頃迄ハ宮内板倉に属せしと見へたりされど太古庭瀬郷有木別所と平家物語に載たりければ宮内の邊もと庭瀬郷に付し成べし此村古しハ海濱にて杉穂谷口地蔵邊

山神社

祭神大山祇命

鼓山 山峰尤高昇龍山と南北相向へり鬼ノ城縁起云留靈臣者有鼓山吉備津彦命ノ鬼神ヲ追廻シ給フヲ見テ大ニ恐慄キ西北三里餘飛去云々と有天正年中羽柴秀長陣所の地也

名越山 杉尾谷の上の山にて峯高く尖り西ハ鼓山につゞけり又名越山と云有太古ハ往還なりとも云

板倉川 板倉とハ郷名にて今の高松の邊より宮内のおたりまで板倉の郷也此郷を流る、川なれハ板倉川と云されば御邊川といひ破出川といひ板倉川といふも皆異名一流なり今の加茂村の邊ハ板倉川の面なれば河面郷といへりか、れハ今板倉村の地を見く此所也とするハ誤り也平家物語に妹尾太郎ハ板倉川のはたにカイ楯をかき待かけたりと有ハ今の加茂村の所也加茂村後都宇郡に属られて郡郷かわりし也妹尾兼康ハ板倉川のはたに付て縁り山の方へ落行けると有ハ今高塚村邊の事にて又妹尾太郎ハ板倉川を西へ渡すといふも今赤



濱の方へ馬にて渡せし也兼康が乗損せし馬ハ溝手のかや野と云所に塚有可考此  
時代ハ板倉川數十町の大河なれば道勝寺に妹尾を葬むるべきいはれなしろは  
古圖を見ても知べき也

板倉の橋 名所の所にも出せり

此橋上にいへる板倉川にかゝりしにや今ハ惣爪村の中にうつもれりといふ前  
にいへる趣にて察すべし  
太平記十六卷云建武三年大江田式部太輔ハ福山の城に楯籠りたるを足利直義  
雲霞の大勢にて取巻散々に攻寄る大江田ハ僅の勢にて叶ふべくもあらざれば  
左のみ精力の盡ぬさきにいさや打て出左馬頭か陣を掛散さんと馬強なる兵千  
余騎引率し一方に扣へたる貳萬余騎に喚てか、れハ是に掛落され散々に崩立  
を式部大輔是をハ打捨東の放れ尼の二ツ引両の旗見ゆるを直義にて予あらん  
とて爰にも二萬餘騎拍へたる勢の中へ破て入時移るまで戦ひて味方の勢を見  
給へハ四百餘騎に成にけり城の方を顧みれば敵はや入替りぬと見へて楯搔楯  
に火を掛たり今日の合戦今ハ是迄にていさや一方打破りて備前へ歸り三ツ石  
の勢と一ツにならんと板倉の橋を東へ向ふて落給へハ敵二千餘騎三千餘騎こ

、かしこに道を塞て打留んどす四百餘騎の者ども遁れぬ所ぞと思ひきつた  
る事なれハ近づく敵の中へ割て入掛散し板倉川の邊より辛川迄十餘度までこ  
ろ戦ひけれされども兵もさのみ討れず大將も恙なかりけれハ虎口の難をのが  
れて五月十八日早旦に三ツ石の宿に予落着たり

板倉橋 板倉町の中に有宮内へ續きたる小川なり昔ハ大河なりしよしいひ傳へ  
り 名所の橋ハ今ハ惣詰村に昔の跡のこれり

大伴會和歌集に云

後一條院長和五年十一月二日主基備中國

丙帖 板倉橋

内藏權頭善滋朝臣爲政

君が御代板倉のはし音にのみ聞ころ渡れ年をつみつ、

後冷泉院永承元年十一月十五日主基方備中國

樂破 板倉橋

空頭兼文博士讃岐權介藤原朝臣家經

行さきに万代もつむ板倉の橋よりわたるき次の中みち

後三條院治暦四年十一月主基備中國

板倉橋有往反人

前筑前守從五位上藤原朝臣經衡



かさまれる代のたのしさを打むれてよろこびわたる板倉の橋  
夫木鈔に云

堀河院御時百首 板倉のはし備中

正二位權大納言兼東宮太夫藤原朝臣公實卿

いたくらの橋をば誰もわたれどもいなふせ鳥乎過がてにする

此橋一説東橋といふよし諸書にいへり孝靈天皇御行幸の時御車の通りしより  
しか名付たるよし又小田郡江良村にも同名の橋有名勝者にも此事を辨せられ  
たり 霞ふる玉ゆりすへて見はかりしはしな降ろとゞるきの橋 藻盤艸に出  
たるよし證歌に引たれどろれハ備中ニハなし近江の國と有なり秋のねざめに  
ハ又大和國と出たりいづれにも本州の名所とするハ覺束なし

板倉の里

大嘗會和歌集に云後三條院治暦四年十一月主基方備中國板倉里

前筑前守從五位上藤原朝臣經衡

菊つめるわさ田の稻のおはかればかさめもやらす板倉の里

廢寺 高藤寺 正善坊 泉藏坊

以上三ヶ寺廢寺と成宗門事歴等記時所見なくて不詳

續松葉和歌集

六字堂宗惠

乗駒のあやふく見へし夕暮にかちより渡る板倉の橋

藻盤艸

左京太夫顯輔

板倉の山田に積る稻を見て治まれる代のはさをしるかな

夫木抄卷二十 板倉山 相模 近江 又備中 悠紀方御屏風

前中納言匡房卿

足曳の板倉山の峯までも積るかり穂を見るを嬉しき

此歌或ハ備中とあれ共大嘗會悠紀方の歌なれハ近江國なるべし

板倉驛 此驛いづれの頃定められしにや不詳往古ハ備前辛川驛今ハ廢せられた  
れ共延喜式驛傳馬條に辛川より備中津隄 河邊 小田 後月と有津岨も今廢  
せられて 岡山 板倉 河邊となりたり

盛衰記 前ニ有

木曾かくと聞てさらば急けど三百餘騎にて今宿を立夜を日に繼で馳下り給ひ  
ける程に其曉に三ッ石に着く明日藤野寺に着和氣の渡りを打渡し可眞郷へ打



入て福輪寺の所を見れば堀を堀切て逆茂木引頼く爰へ通りがたし如何して間道を知らんとて其邊を打廻りて里人を尋ねけるに可真郷の住人ニ惣官頼隆と云者を尋出して先陣に進み北路に掛り鳥ヶ岳と云所を廻り佐々井より関を咄と造り掛て佐々ヶ追を責たりけり妹尾ハ兼て木曾ハ今宿に三日の逗留なればたとひ此事漏聞へて寄るとも福輪寺の畔へきて寄がたしされば只今の事にてハよもあらとと打延て思ひけるにときを作り掛りかけて寄たれば駈り武者どもハ一矢射るに及ばず皆散々に落行けり自先立者ハ助かりければ返し合す者の助かるハなし深田へ退込々々切殺し射殺し佐々追を攻落して唐皮宿板倉城に押寄て時を作る妹尾おもひ儲たる事なれば矢たばね解て散々に射る木曾ハ妹尾逃すな兼康あますなど攻よ攻よと下知しければ郎等ども入替り入替り射合たり妹尾矢種盡ければ主従三人山に籠る夫より相落て矢嶋へ參らんす趣さける程に子息小太郎兼通ハ肥太りたる男にて歩ニ不合期ければ足を痛て山中に留る兼康ハ思ひ切小太郎を捨て落行けれども恩愛の道の悲さハ行ども行ども不歩小太郎また父の兼康を呼ければ兼康歸りていかにと問せる要事ハ侍ら守爰を最期と存ずルハ今一度見參らせんとて答へ涙を流しければ兼康の袖

を絞りけり一年新大納言成親丹波少將成經に情なくあたり奉りたりしか親子の中の悲しさは今ころおもひ知られければ敵近く攻寄ければ兼康又思ひ切深く山へ落入けるが眼に霧雨ふりて進まれず郎等宗俊を呼て兼康ハ數千人の敵に向ひて戦ひにも四方暗て見ゆれども小太郎を捨て落行ば涙にくれて道も見へず兼てハ相搦て屋嶋に參りて今一度君をも見奉り木曾に仕へし事をも申さばやと思ひつれども今ハ恩愛の中の悲しけれハ小太郎と一所に討死せんと思ふハいかゞ有へきと云宗俊尤さころ侍べけれ弓矢の家を生れぬれば人どになき跡までも名を惜む習ひなり明日ハ人の申さん様ハ兼康殿ころいつ迄命を生んとて山中に子を捨落行ぬれといわれん事も口惜き御事成べし主を見奉らんと覺へぬも子の末の代を思し召故也小太郎殿亡び給ひなんにハ何事も何かはし給ふべき只返し合せて三人同心に一軍して死出の山をも離れず御供仕らんと云ければ兼康然るべしとて道より歸り足痛ニ居たる小太郎が許に行前にハ柴垣をかき後にハ大木を木楯にして敵を待所に木曾左馬頭三百餘騎にて跡見に付て尋けるに兼康爰に在とて幾程助かへべき事ならぬと小太郎を後に立て我身ハ矢面に指顯れて指詰挽つめ散々に射て十三騎に手を負せ馬九匹まで射



殺し矢種も又盡ければ今ハとて腹を掻切て矢にけり小太郎兼通も引つめ引つめ射けるが父が自殺を見て同じ枕に腹切て臥たりけり郎等宗俊も手の定り戦ひて柴垣に上て剛の者の死するを見よやとて太刀の切先口に含み逆さまに落貫かりて死したりける木曾ハ妹尾父子が頸を切備中國鷲の森に掛て引退く萬壽庄に陣を取後陣の勢を待もふけて是より平家を追討のため屋嶋の發向を予議定しける

瑠璃光山玉泉寺 古ハ眞言宗

小田郡横谷村寺株を以て新に草創す

野山北村 野山郷

宇山 岨谷 宮地 野山北村 是を野山里といふて野山五ヶ村と稱す野山両

村となりし年歴不知

高千十五石壹斗九合

吉備國史同斷

妙本寺末

松玉山妙音寺 高五十石五斗五升五合八勺

全

興福山常護寺 高七石九斗八升壹合七勺

全

神明山稻荷寺 高三十一石八合七勺

大明神

天神

荒神 小祠三

大歳 同 四

龍王 村中氏子なり

野山城趾

府志云城主伊達宮内少輔益友細川家の門葉也云々

諸書野山宮内少輔いつとる野山を領せし故かく稱せしにや西園太平記に工藤

野山ハ庄が縁者也云々是ハ庄勝資が鎧にて宮若丸が姉を嫁したり

初め大内又毛利ニ属し三村元親毛利に叛きし時三村に黨す依之元就三村が一類

を亡ばさんとして天正二年大軍を差向け松山城を後にしてまづ端城を攻拔べしと



十万の兵を手分して一番に三村兵部之丞が齋田城を攻ければ兵部之丞叶はずし  
て城を明け松山城に替り多喜之庄矢倉畝の田中掃部介直重同忠兵衛直久も踐堪  
へず明去と聞へしかば有漢多氣之庄庄田山野山四ヶ所の要害も所詮防戦叶ひが  
たしと同十二月遂にいづれも落去り後太平記、陰徳記

備中兵亂記に天文九年八月尼子晴久三吉備後が籠りたる備後國比叡尾の城へ押  
寄せしに野山宮内少輔三村修理之進二階堂赤木上野等都合六千余騎にて備後東  
城雲州横田大坂峠要害を搦へ九月二日尼子が陣に夜討をかけ散々に敵を打破  
り明る十年七月尼子又毛利元就が藝州吉田城を囲む大内義隆備中の諸將に下知  
せられて尼子が後をたつ野山宮内少輔三村赤木以下今度も大坂峠を固めて雲州  
勢が兵糧の道を遮りたりしかば尼子藝州にこらへ得ず早々雲州へ引退かく尼子  
毎度利を失ひしかば備後石見出雲の内にて吉川三刀屋其外大内ニ志を通はしぬ  
さらば此時に乗つて尼子を亡ぼすべしと同十一年正月義隆雲州へ發向す伊達宮  
内少輔三村家親二階堂赤木等當國の武士先登して先赤穴の城を攻め城主赤穴左  
京亮を降し是を手始として所々の戦ひ軍功を顯わし永祿二年九月宇喜多直家備  
中國へ働かんとて虎倉城主伊賀左衛門尉久隆をして竹の庄吉川近邊の村々を犯

し掠む依之中嶋加賀守藤澤城を保ち野山宮内少輔石川左衛門尉穂田元祐等伊賀  
が手の被田城を守りたり片山彌左衛門河田又左衛門等といきみ戦ひ終に鼓田を  
乗取て手柄し同七年浦上宗景再度龍の口城を取返さんと宇喜田直家を始め備前  
美作の勢十重廿重に取囲む此時城に籠れる福屋與七郎藥師寺彌五郎等防戦せし  
かど敵大軍成がうへ城中兵糧乏敷こらへしべふもなし是に依て當國の將士加勢  
して馳向ふ一手ハ野山宮内少輔三村赤木石壁等七千人菅野横井桑原村より笠  
井谷へ出張す其外備中の將士三方より押寄浦上が勢と掛合せ互にいきみ戦ふた  
り然るに妙善寺口の戦ひ石川中嶋等討死し敵其勢ひに乘し龍の口二三の丸まで  
攻入る城内よりも爰をせんぞ、死力を盡し防さけれ共勝はこつたる備前勢なれ  
ば所詮叶ふべくもなかりし處に野山宮内少輔三村赤木穂田細川伊達等備前勢の  
横合より火を放て切て入必死と成て戦ひければ敵是になやまされ手負討死數多  
出來今ハ戦ひも是迄也と殘兵をまどめ引退さけれハ城中虎口をまぬかれけり  
伊達宮内少輔益友宅址

具足山妙本寺寒松軒

日蓮宗京都妙顯寺末同寺隱居寺とす備中宗門の末頭也



本尊釋迦佛 本堂六間 庫裏 客殿 仁王門九尺 三十番神堂 寒松軒 鐘樓堂  
小社 龍王 寺中五ヶ院有

屋敷九畝十歩田壹畝廿六歩畑六反七畝歩 本堂屋敷壹反貳畝歩  
高二十七石六斗六升六合 堂後山三反三畝十歩除地

弘安四年弘通大道師日像の開山といへり往古天台宗の寺有て彼宗の墓數多有し  
をいまわしき心地やしけん追々に取捨るといふ宗門ハ何にもまれ後世を吊ふハ  
佛家の本意成べきを我宗の墓ならしとて掘捨るといふハ其心押はかられて淺間  
敷所爲なり妙顯寺住僧日具此地に來りしより日蓮宗と成今に至れる事儘なり妙  
本寺日蓮宗開山より四十八代僧の名あれ其中にハ年月日の無も有ハ實に疑ふべ  
し彼縁起にいへる日行上人後百五十余年無住にて諸堂も零落に及びしと有も天  
台宗を除んが爲の作意ならずや確眼の人察すべし日具日芳の墓有又寺の側に伊  
達卿正朝義の墓有伊達氏代々の城趾ハ寺の前に有て朝義文永十一年ニ來り徳治  
元年十一月廿二日死す伊達氏菩提寺なるよし朝義法名妙本寺にて全光院殿休賀  
大居士と有も後世よりの追号なるべしまた野山宮内少輔益友毛利家を去て文祿  
四年四月十九日死寛智院殿道賀大居士室ハ天正十九年十一月九日卒法名眞乘院

殿妙賀大姉と書付たれども是も院殿大居士ハなかるへし  
妙本寺日具聖人傳

吉備物語ニ引龍華傳云日具其姓を詳にせず蘇州嚴島の人也小童にて出家し妙  
顯寺日明を師とし仕へり其人となり博く學びて物覺へつよく主職に居して後  
弟子の日芳に寺を譲り與へ退て當國加陽郡野山の境智寺に來り寒松軒を作りて  
幽居せり明應六年の春吉田の卜部兼俱が法華宗三十番神の事に就て問難の一  
篇を本國寺妙蓮寺妙顯寺へ寄らる是一大事也いかゞ致すべきと僉議有てはる  
はる當國まで使僧を立て返答を待侍るに日具一覽して則番神問答を著述し遣  
ハす其旨道理明らかにて吉田兼俱嘆美して賀札を送られしより今に寺に番神  
堂を建る事日具の智徳勝れたる故と云文龜元年二月二日終に當國寒松軒にて  
寂す年七十九歳也

三十番神ハ延久年中南樂阿闍梨良正肇て是を云出し明應六年日具の番神問答  
著せり而番神の名三品有今用ゆる所ハ即良正法師が云肇る處のものなり  
西國法華最初之靈場備中野山妙本寺縁起

抑當山ハ人王九十年代後宇多院の御宇弘安四年の開闢也開祖花洛弘通の大導師



日像菩薩建立大檀那ハ奥州伊達陸奥守末子彈正朝義鎌倉將軍惟康公より當國  
 當所におひて新地四千石拜領これ有也朝義鎌倉本地の朝宗祖龍の口の法難親  
 り其夜の奇瑞を見奉り信伏隨從して吾祖の檀越となり當國入部の節甲州身延  
 山御艸庵へ往詣して當所拜領の旨趣具に宣へ大聖人御下向有て一寺を開き給  
 へと云吾祖曰我此山に閑居する事かたくゆへ有て也西國に下るべき導師有と  
 て經一丸をよんで師檀の契約あり吾祖具足山妙本寺と名付開基日像經一御定か  
 かれ御直筆一部一卷の法華經十界勸請の御本尊朝義へ御授與也此御經後に名  
 付て矢留の御經と云入部の歳當山を開き齋料として高三百石納めらる然るに  
 永仁の初日像聖人帝都弘通のよし聞へければ横田權之進を使として請待に及  
 ぶと雖も像師花洛弘通退きかたく延引の旨仰有て一紙御本尊御した、め三十  
 番神御開眼妙本寺鎮守に崇め奉るべしと云々像師御名代として大覺大僧正正  
 和の頃當山へ御入山也今本堂に安置し奉高祖大菩薩の尊像ハ大覺大僧正日朝  
 聖人より譲り受け鎌倉松葉谷より背に負て來り給ひし尊像なり  
 六世九老僧日行聖人の後百五十餘年も無住にて諸堂至て零落に及べり妙顯寺  
 日具僧正當山へ御入山ありて再建し後代四海唱導閑居所と定かかる、也

明應六年の春吉田の神祠卜部の兼俱より宗門勸請の番神を拒んで推問狀をか  
 くれり然るに本國寺妙蓮寺ニケ寺の返答理にあたらす唯當寺日具僧正の酬答  
 文理真正に詞義絶妙にして兼俱遂に歎伏せり則賀札を具師に贈れり其文ニ曰  
 披て覽之當寺の貫主具公法眼の文質乎外典の才明秀發况内典の鑽仰碩學哉忽  
 に開入萬法藏於一卷中消二千餘回於一時間及圓宗大乘の説相加之得天道循  
 環の運數勘妙經相應の時節今於此人聞斯言天幸者乎兼亦測神道の才覺既  
 入神書の奥籍悟家傳密意大哉至哉可謂千載之一遇乎前後略  
 其師の返答的當せずんば宗門の番人此時に破却せん今に至て諸山に番人を勸  
 請し寺門の鎮護に備ふる事は當山の餘慶ならずや爾來ハ僧俗共に知て弘す或  
 ハ知らず因茲畧して緣起を記す信あらん人ハ參詣して現當兩益を祈るべき者  
 也

享和三年歲舍癸亥二月八日 改版

野山喜十郎

難波沖右衛門

難波郡藏

彫刻施資



堀 茂之亟

わかすとも秋の野山の里人ハ曇りなき夜の月を見る哉

賀 札

右本朝弘長、春有<sub>二</sub>載<sub>レ</sub>日乘<sub>レ</sub>道之人<sub>一</sub>一日入<sub>二</sub>予祖家<sub>一</sub>問<sub>二</sub>吾神道<sub>一</sub>答以<sub>二</sub>一義<sub>一</sub>矣今盤緣<sub>二</sub>此因<sub>一</sub>訪<sub>二</sub>彼徒<sub>一</sub>以<sub>二</sub>寺門之崇祠<sub>一</sub>矣舉<sub>二</sub>一同之間話<sub>一</sub>寄<sub>二</sub>三寺之住侶<sub>一</sub>第一妙本寺第二妙蓮寺(雖爲一流近頃有法理之差故)第三本國寺彼所答不立<sub>二</sub>人文句<sub>一</sub>唯取<sub>二</sub>目錄<sub>一</sub>曰惣要<sub>二</sub>諸神<sub>一</sub>云々故不能<sub>レ</sub>再問<sub>二</sub>矣妙蓮寺二問<sub>一</sub>二答至<sub>三</sub>三問<sub>一</sub>止返答矣爰洛陽弘通<sub>二</sub>妙本寺贈答錄<sub>一</sub>去五月第三日而他日付<sub>二</sub>專使<sub>一</sub>披覽<sub>レ</sub>之當寺<sub>二</sub>貫首具公法眼<sub>一</sub>之文質<sub>二</sub>乎外典<sub>一</sub>之才明秀發<sub>二</sub>况內典之鑽仰碩學<sub>一</sub>哉忽開<sub>二</sub>八萬法藏<sub>一</sub>於一卷中殆消<sub>二</sub>四十餘歲<sub>一</sub>(二千餘回)於一時間及<sub>二</sub>圓宗大乘之說<sub>一</sub>相加之得<sub>二</sub>天道循環之運數<sub>一</sub>勘<sub>二</sub>妙經相應之時節<sub>一</sub>今於此人聞<sub>二</sub>斯言<sub>一</sub>天幸者乎兼亦測<sub>二</sub>神道之才覺<sub>一</sub>既人<sub>二</sub>神書之奧籍<sub>一</sub>悟<sub>二</sub>家傳之密意<sub>一</sub>矣大哉至哉可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>千載之一遇<sub>一</sub>乎夫神道者有<sub>二</sub>三種之差別<sub>一</sub>一者本迹緣起<sub>二</sub>神道某宮某社化現降臨勸請以來就緣起之山緒<sub>一</sub>搆<sub>二</sub>一社之秘傳<sub>一</sub>以<sub>二</sub>口決之相承<sub>一</sub>稱<sub>二</sub>累世之祠官將亦修本地之法味<sub>一</sub>准<sub>二</sub>內清淨之理教<sub>一</sub>捧<sub>二</sub>祭祀之禮奠<sub>一</sub>備<sub>二</sub>外清淨之儀式<sub>一</sub>云<sub>二</sub>是本迹緣起<sub>一</sub>又云<sub>二</sub>社例傳記之神道<sub>一</sub>是<sub>二</sub>二者兩部習合神道也<sub>一</sub>以<sub>二</sub>貽金兩界<sub>一</sub>習<sub>二</sub>

内外二宮以<sub>二</sub>諸尊<sub>一</sub>合<sub>二</sub>諸神<sub>一</sub>故云<sub>二</sub>兩部習合<sub>一</sub>又云<sub>二</sub>大師流之神道<sub>一</sub>是<sub>二</sub>三者元本宗源之神道<sub>一</sub>是吾家之相承也元者明陰陽不測之元々本者明<sub>二</sub>一念未生之本<sub>一</sub>宗者明<sub>二</sub>一氣未分之元神源者明<sub>二</sub>和光同塵之神化<sub>一</sub>故曰<sub>二</sub>元本宗源<sub>一</sub>又云<sub>二</sub>唯一神道<sub>一</sub>是<sub>二</sub>唯一者天大祖神授<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>天照大神<sub>一</sub>天照大神授<sub>二</sub>賜吾天兒屋根命<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>爾以降<sub>二</sub>授與相續<sub>一</sub>及<sub>二</sub>第二十<sub>一</sub>一世大織冠<sub>二</sub>至兼俱<sub>一</sub>二十五世脈々不絕天地開闢以來唯汲<sub>二</sub>一氣之元水<sub>一</sub>不嘗<sub>二</sub>三教<sub>一</sub>之一滴<sub>二</sub>續神代付屬之幽迹侍<sub>一</sub>神皇寶位之師範<sub>二</sub>矣嘆哉不辨<sub>二</sub>九牛之一毛<sub>一</sub>而遺<sub>二</sub>血氣一脈<sub>一</sub>矣抑<sub>二</sub>三十番之由來<sub>一</sub>並諸神尊崇次第御答趣大底不出<sub>二</sub>國之號令<sub>一</sub>者乎蓋<sub>二</sub>釋三教之道理<sub>一</sub>會<sub>二</sub>一神之玄妙<sub>一</sub>者乎次又靈靈請<sub>二</sub>否事者<sub>一</sub>一旦示<sub>二</sub>國家之規範<sub>一</sub>耳非<sub>二</sub>敢<sub>一</sub>吾道之競望<sub>二</sub>者也殊更<sub>二</sub>每度及<sub>一</sub>奏達<sub>二</sub>附與之<sub>一</sub>隨<sub>二</sub>入境勅許定<sub>一</sub>可有<sub>二</sub>用捨<sub>一</sub>歟旁以<sub>二</sub>絕<sub>一</sub>是非之限<sub>二</sub>而已就<sub>レ</sub>中吾

垂仁天皇二十六年佛法未<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>于漢朝<sub>一</sub>送<sub>二</sub>七十三星霜<sub>一</sub>彼明帝永平十三年騰闡<sub>二</sub>沙門初而入<sub>一</sub>震且流<sub>二</sub>大教<sub>一</sub>者乎吾人王<sub>二</sub>三十代<sub>一</sub>欽明十三年佛法傳<sub>二</sub>本朝<sub>一</sub>漢永平以來及五百年乎神語後得<sub>二</sub>五百三十餘歲<sub>一</sub>矣神哉妙哉就<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>御答中

神武格式 垂仁告託及<sub>二</sub>告後之勘答<sub>一</sub>最以明白者乎但其文意賢覽恐<sub>レ</sub>邪乎所以者何未世之神巫諸群生名稱<sub>二</sub>神託<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>專<sub>二</sub>邪偽<sub>一</sub>事爲<sub>二</sub>堅固制止<sub>一</sub>之神宜乎曾以<sub>二</sub>非<sub>一</sub>神降



鎮座停廢者哉或經云隨文取義三世諸佛從以上文是謂之乎是以全非勸善懲惡之簡者也傳聞當寺中興之實長始被浴極官之朝裝哉誠是一門惣別之光花一流無雙之榮林乎我君王之恩化豈非神明之加護哉國是神國也道是神道也被存土地之報賽被仰金廷之歸敬者得日不可隔於日得晴不可移於時乎神明而顯妙々明而顯神嗚呼神妙之二字爲能說爲所說仰乞削予小量添公博覽焉謹爾對

明應六年十一月 日

神道長上拾遺位二品下都兼儀

妙本寺貫首法眼御房

野山彈正朝義墓

妙本寺の側に有り墓の文字不知土人の云ふ所を證とす

陸奥守伊達氏の末子也委敷ハ妙本寺の條ニ出せり

野山郷

野山西村 吉備國史同斷

高八百七十貳石貳斗七升八合

野山郷八ヶ村野山郷の内をすれども和名抄野山といふ名を載すいつれの郷に屬せしにや不詳

一至山本迹寺 野山北村妙本寺末

田地十三石貳斗三升五合七勺

妙足山圓滿寺 野山北村妙本寺末

田地十石八斗四升貳合四勺

天王社 田渡りニ有拜殿あり

荒神 拜殿有

御崎神社 小祠

祝神 同

荒神 同

大藏神社 同貳

山王權現 同

注連神 同

山王神 同



天神 同

龍王

讚岐神

太宰神社

龍王社 枝郷湯原ニ有是ハ村中より搦

山王權現 湯原ニ有 本社 舞殿 祭禮九月廿六日より廿七日也

野山 野山ハ郷名なれば村の名をも野山と云今ハ四ヶ村と分られたれど昔ハ一つらねの野山にてろ

野山里 野山西村野山北村 上房郡なるよし

夫木鈔ニ云野山の里 野山備中 正安大嘗會國々名所歌

大藏卿隆教

あかすころ秋の野山の里人ハ憂りなき世の月を見かな

松葉集 野山の里

清之

名にしおふ野山の花の目うつりに心ときめく里の春かせ

宮地村 野山郷 吉備國史八百六十石餘

高八百六十八石九斗貳升九合

同名の事 古事記傳ニ本居大人曰古事記ニ宮首之別といふ在て宮首ハ二字なから決く寫謬なり宮道なるべし其據ハ舊事紀に稚武王ハ近江の建部の君宮道君の祖也と有是なり景行天皇の御子に宮道別皇子と申す其書紀に見ゆさて其地ハ和名抄に參河國寶飯郡宮道村有也宮地山といふも此地也又此姓ハ續後紀四に賜宮道宿禰吉備鷹同姓吉備繼等に朝臣の姓をて見へて三代實錄三十三宮道朝臣彌益てふ人見ゆこ、の宮地の名も文字ハ違へれどもか、る故由にはあらしか

寶塔山和泉寺 野山妙本寺末

田地貳十石八斗六升餘

神高山圓通寺 野山妙本寺末

高貳石六斗三升餘

八幡宮 原前ニ有リ 本社 拜殿 鳥居有野山四ヶ村惣氏子也祭禮九月廿八日

御崎宮 山根ニ有 本社 拜殿有 祭禮九月廿七日

岩山權現宮 岩山ニ有 本社 拜殿有 禮祭十月朔日



荒神 小祠

天王 同

龍王 同

野山郷

岨谷村 吉備國史同斷

高八百四十六石六斗九升壹合

もと野山東村と云元祿以後岨谷村と云

天神宮 枝郷東村ニ有 本社 拜殿

荒神 本村ニ有 小社 拜殿

龍王 同

御崎 本社 舞殿

天神 小祠

東清山真成寺 野山妙本寺末 田地壹石貳斗三升九合九勺

天久山妙教寺 野山妙本寺末 田地十三石三斗三升八合

野山郷

宇山村 吉備國史同斷

高貳百七十五石九斗六合

上山山常福寺 新地の寺也 松山松蓮寺末

六社權現 本村ニ有 本社 舞殿 別當常福寺 祭禮八月廿七日廿八日本地六

地藏にや

荒神 小祠

妙見 同

三崎 同貳

稻荷 同

天神宮 同

大神宮 同

大倉神社 同

山ノ神 同

法敬山妙徳寺

真言宗 庫裏二間ニ三間本堂一間四方



野山郷

延原村 吉備國史同斷

高三百五十四石五斗六合

御前大明神 本社 舞殿 祭禮九月十五日十六日

荒神 小祠

龍王 同

神子神 同五

大倉權現 同

御崎宮 同貳

高福山延命寺 山田花光寺末 田地三石餘

高野明神 小祠

大宰神 同

大倉神 同

天王 同

八大龍王 本社 舞殿有

延原川 延原の山溪より出て日羽村を過て松山川ニ合す

野山郷稿

稿村 吉備國史同斷

高百三十四石四斗貳升壹合

稿福山東福寺 羽無村吉祥寺末

山ノ神 本社 舞殿 鳥居

荒神 小祠

龍王 同

大倉神 同

野山郷

種井村 吉備國史同斷

高三百九十三石四斗三合

鷄足山 種井村の内にて原村高間米山を跨り大山なり

天正三村か勢此鷄足山の麓にて討死の事兵亂記ニ出たり

種井村



苗代の水はいな井にまかせたり云々の歌を引て此種井村のことく など載  
たれどもおもわれずるハ小田郡宇内村の下道郡本庄村ノ條下に委敷いへり

鷗足山高間寺 高間ニ有 山田村華光寺末 本尊藥師佛

井陽山東光寺 羽無村吉祥寺末

八幡宮 本村ニ有 本社 舞殿 鳥居有 祭禮八月廿一日廿二日

御崎宮

天王權現 小祠

大神宮 同

犬蔵神 同貳

伊豫神 同

神子神 同

御前 同貳

七社 同

大倉 同

大藏 同

稻荷 同

矢天 同

日羽郷

美袋村 同名播磨國美袋郡 筑前國下座郡美那宜神社有

吉備國史同斷

高六百三十貳石八斗三升三合

大渡城 城主結城民部丞忠秀 三村元祖カ附庸也

天正三年の亂に落城し正月二十日兒島に立退陰徳記五十二又府志ニ永正年中  
陶山氏の人小田郡笠岡の城より移り住ミ氏を改めて田邊出雲守高倫と云よし  
不詳或云西濱村城主陶山義高の後朝敵なる事を怖れて母方の姓を冒すといふ  
古松軒云里人の傳にハ城主姓名不詳城の盛なる時ハ今の町ハ昔の家中屋敷な  
りと云ふ

岸の上要害ハ集成志に高戸氏居住すと云

古松軒云 安永七年の秋土人田邊安九郎といふ人の下人茶の木を植をるとて畑  
を穿らしに土中より瓶を掘出せり其内に金銀數多を藏せり狀丸き有長き有丸



さハ大体大判のごとく長さハ竿鉛のごとく重さ不同有て今の秤目にハ不合とも或ハ七文目或ハ八文目など其輕重ハ悉く彫付たり金銀の都合壹貫目計も有といふ

大渡り 美袋村のこと、て

思ひ出て渡りやせまし由良の舟をみなぎの船の楫をたへてや

此歌いづれの書に出たるや不詳 吉備集成志に載たり

大渡り山峰 西方ニ走り出て蟠蜿して馳せ川の岸に望ニ出る頂に城趾有て壇取残り

和伎覇ノ里

和爾雅ニ備前國の名所とし秋の寢覺にハ此國の名所とし美袋の事とすれと彼證とせるはるさればわさへの里のかはどにはあゆこさはしる君まちがてに、といへるハ萬葉集卷五松浦ノ娘等更報歌三首といへる中にて和伎覇ハ吾家の里といふを約めたる也同書七の卷にも、珍らしき人をわさへにすみの江の岸の垣生を見んよしもがな、又わさへの梅を花に散らすな、又和伎覇乃曾能爾驚鳴毛云々など出たるも皆吾家といへるなり

八幡宮 大菩薩 本社 舞殿 門守人 石鳥居 石清水勘請故菩薩號也 祭禮八月

十七日

御前宮 本社 舞殿 門守人 祭禮九月十三日

厄神發祠 本殿 拜殿 石鳥居 祭神祇園宮

荒神 小祠五

大歳神 同

寶來山榮福寺 上林園分寺末 本尊藥師境内十八間ニ十四間除地山林一反除地

後太平記四十二城主三村民部丞天正年中元親反逆に黨し毛利大軍五萬餘騎打向ひたるに不叶して降人と成降人殺す法なしとて備前兒島に流さる

日羽郷

日羽村 枝郷 作原 日羽郷 和名抄ニ日羽 比波

高六百八石九斗壹升三合 吉備國史高六百石

荒神 小祠

大明神 同

此地康安年中等持寺御領なり 康正二年造内裏段錢並引附帳ニ云 十二貫二



百文 五月廿九日廿七日定 等持寺領備中國日羽郷段錢と有月日付ハ即國役引付にて錢の數ハ段錢なり

八幡大菩薩 片山と云所ニ有

石清水勸請の故菩薩號也 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 寛文七年迄ハ昔より別當持なりしが夫より神職持となる祭禮九月十五日

八幡大菩薩 作原ニ有

是も石清水勸請也貞享元年鎮座除地山林壹反計 本社一間 拜殿 社僧普門寺 神人

別所山正滿寺

禪宗井山末寺開山不詳

如意山安樂寺

禪宗井山末寺 康永年中建立山林除地田地二十石餘施庵惠聽和尚の開基といふ其後貞和年中再興有日羽村領主具原縫殿介安宗中興擅那とす 住僧歴代

○光泉 惠谷 安譽 欄谷 惠傳 春光 光宗

淨海 徳翁 俊谷 惠良 惠欄

享保年中迄如此

法福山普門寺

眞言宗國分寺末寺 往古ハ鍛冶屋坊として山伏寺なり貞享以後普門寺と號す境内東西十九間ニ十六間山林五十間四方免除田地九石計 鎮守 愛宕權現 一間四方除地



備中誌加陽郡卷之十二

八部郷

八田部村 和名抄 八部 也多倍

高千六百三十一石貳斗九升九合 吉備國史同斷

野俣神社 延喜式神名帳 = 出備中國十八神ノ一也 惣社宮を云ふよし集成志 =  
ハ社地不詳

文徳天皇嘉祥四年正月庚子正六位上清和天皇貞觀元年正月廿七日甲申從五位  
下

神樂岡

或説に入田部村の惣社宮のはとり也といふて證歌など載たれと誤なり神樂岡  
は山城國にいちしるき所にて證歌てふもかしの歌にて藻蘆草に誤りて備中  
に同名有といへるにすかりて此國にもとむるハひがことなりろは名勝者にも  
辨し給ひぬ

越中畑

村山越中 備前宰相忠雄卿の家臣にて祿千石を賜ふもと徒士より經登りし程



なりし故剛氣のヨにて智なく常に大言を吐きし者也或時賣馬の場にて人と口論し出し相手を斬て立退加賀に仕ふ又同ト備前に仕へて越中が舊友なりし曰井十太夫といふ者長六尺に餘り力十人を并せたり加州の士とも交會の時曰井が事を語り出て口々に譽けるを越中妬ましくやおもひけん我岡山に在し時ハ兎や有し角や有しなと色々曰井が事を誹謗す其事誰云となく曰井傳へ聞て惡き者かなと憤り思ひ居たるがひと、せ加賀中納言利常卿伏見に來り給ひし時越中も御供にて登りたりしが曰井もこゝに登り合せ書を以て其上しをせめしに越中左あらぬよし答へぬもとより巷説にて健かならざる傳へなれば聞誤りにもやあらんと夫よりハ逗留の間も心安く互に音信を通しが越中加賀に歸りて傍輩に語るよふ今度伏見にて曰井に會せしに一旦遺恨かましくいひこせしかと吾さびしき返答にけつく閉口せりなといひはやしぬさしも斯るさがない者なりし故後には加賀をも又浪人して常國松山池田備中守長吉の家中に入し餘術の師範なとじて居たりしが或時此八田部村にしろるべ有て止まりしを曰井聞付て爰に來り使を以ていわせけるはさきに加賀に在し時よりあらぬ事いひてしば々我を誹謗する條ものゝふたる身の所爲ともおぼへず今ハ聞捨が

たければ潔よく勝負を決して日頃の遺恨を晴すべし いひやりければ素より踏しめたる勇なき者なれば所詮曰井に立つくへうも覺へねばひろかに立退かんといふを門人どもふがひなしと様々陳むれども聞入す其夜女の体に粧ひして駕籠に乗出けるを曰井かくと聞より今の焼場の東に待受て何者なるやと問ふを越中が男是ハ病る婦人の外へ行なりと答ふ曰井左ハいわせしとて駕籠の頭を棒にあて、撲きければ目眩して仆れたり越中刀を取て出んとすれども乗物地に擲ける故戸開けす左の方よりなかなば出たる處を手もなく斬殺せしとなん此越中が討れし處を今越中畑といふ武將威狀記にハ備前兵甘村にて討ると有るハ誤りなる事吉備した道にも辨たり此越中が駕籠を昇し者の子孫今に八田部の町に有しとかや

長養山福壽寺 井山末寺 建立年代不詳開山南英詢なり今改宗して眞言宗となり應永の帳にハ福住寺と云寶福寺帳ニハ福壽寺と有 觀音堂一字存せり  
大社 國祖屋敷 惣堂宮ハ大己貴命にて日本大社のよし國祖に見ゆと集成志に有諸神集り給ひて裝束し給ふ所をヲハカマキと云て今に田地の中に注連して是を崇め祭る也



木幡山法滿寺勝宣院 上林園分寺末

本尊千手觀音二間四方住房三間半七間

鎮守天神宮四尺五尺境内六畝除地

此寺實相坊の跡を繼て建立すといふ

神宮寺 但し惣社別當也 惣社境内ニ田地九石餘

龜樹井 名勝考ニ云此地未詳こゝるニにいわんにハ八田部村の枝村植木といふ

所ニ有しかもどハ龜木を訛りて上木とたわややく書つるを後人謬りてウヘキ

と唱へ又後に誤りて植木と書しにハあらずやかなハ違へれどさる例多きこと

なり同敷所に井手といふ所も有也又清水といふ所も有てよし有がごとし又下

道郡本庄村の枝村に神木ありカウモキとは唱ふれども詞のよこなまりハ常の

事なれハこゝにもやと思ひよれるまゝに記す

大嘗會和歌集に云

村上天皇天慶九年主基備中國風俗神歌龜き井

きひの中かめのまかするかめさむのながれて御代の霞イカゼヘンうめけん

後一條院長和五年十一月二日主基備中國

甲帖 二月 龜樹井

内藏權頭善滋朝臣爲政

萬代をありへん君はかねてよりかめさむの井に予影ハ見へける

龜住井名勝考ニ云住の字心得られずもしくハ往の字をあやまれるか

萬代を喚山より流れ出る水ヲ龜木の井せきなりける

名勝考に云喚ハ喚なり古本日本後紀に喚を澆換を換と書たり其外にも古書に

も例多し

八幡宮 八田部郷の内西山村と云所ニ有神主西山氏

戸城 府志ニ云 當城ハ藥師寺十郎朝貞太平記建武三年足利直義湊川にて楠と

合戦の時直義が馬矢ニ當て已に討れぬべく見へけるを藥師寺蓮池の堤にて返

し合せて馬より飛て下り二尺五寸の小長刀の石突を取延て掛る敵の平頸ムナ

カヒの引廻し切てハ刎倒し刎倒し七八騎程切て落し郎從六人うたせ其身も四

ヶ所手負ふ其際に直義ハ落延給ひぬ藥師寺尋常の兵ならば已に討れぬへけれ

ども力量早業人ニ勝れければ命恙なかりしなり太平記に備中の住人と見へた

り近世藥師寺袖岡と改稱し一族堀龜山池上福武など今もろれが子孫相續せし

と云覺束なし



惣社大明神 八田部郷の惣鎮守所祭大已貴尊也

集成志ニ出雲大社の舊地なるよし國造屋敷の跡同所詣上ムラケ村ニ有古しヘ諸神と書たりしを今上の字に改むといふ蘇民將來も當國の人と云  
神主ハ大宮司と唱へ其外祠官十餘家あり  
關政方大人云

惣社と申へいづれの國にも有て大方國府近き所に有るハ 延喜式四時祭式祈年祭の條に國司祭祈年神二千三百九十五座云々右國司長官以下准例散齋三日致齋共會祭之(祭日并班幣儀並准神祇官)其幣皆用正祝と有神祇官ニて祭らるゝことなり其ひとつ所へかさね祭る故に惣社といふなるべし則國司の神祇官也しかあれば此國の惣社ハ十八社おはしまして唯一つの神社にハあらざるべし云々

大宮司池上嘉内本村に有神田引七石定米御地頭より御地領十二村氏子境内壹町六反五畝七步蒔田俣より五斗つ、

境内末社  
天神

辨天

荒神

大神

藥師堂鐘有末社三百二十四社出雲大社より勸請當子迄二千八九年になる神主四十五軒松山領他領共ニ有祭九月戌夜より亥夜迄亥の日當月二日有時ハ末の戌亥三ツ有時ハ中の戌亥也正徳四年午九月大宮司藤原定久池上山城守定久と有風折鳥帽子狩次也紗とハなし四組木綿ヲすき萌黄也四組掛等の事裁許年月右同時なり

荒神 小祠

尊神 同

若宮 同

榮林坊 上林國分寺末 本尊阿彌陀 境内二十間ニ南北十六間除地  
但し田地九石餘 本堂二間四方住坊二間半六間  
西光山眞鏡寺 上林國分寺末 本尊阿彌陀 境内六畝七步除地



但し田地十五石餘住坊二間ニ六間  
鎮守八幡宮五尺四方

堀内城趾

府志云當城開基頼宮四郎左衛門 也後年堀氏居すといふ頼宮四郎左衛門ハ  
先帝未笠置に御在せし時兒島備後守と一手に成て千種殿に屬し元弘三年二月  
摩耶山合戦に頼宮小寺の黨と五百餘人大山の崩るゝがどとく打て出て敵あま  
た討取同く四月殿法印良忠中院定平大將として軍を出し給ふ時ハ伊藤松田等  
と三千餘人伏見木幡に火を掛け竹田鳥羽より押寄て功有六波羅退治の時ハ西  
山の峰の堂に陣したりけるに忠顯峰の堂を落て入幡にかはしける時赤松圓心  
に從ひ其後赤松播磨の守賤職を召放されし時新田左中將義貞に屬してけり又  
尊氏の威強く成てければ從之建武の亂に細川禪定に屬して軍忠をなせしが山  
名伊豆守美作へ發向の刻に心不定なる行跡有又直冬の(足利)西國に起りし時  
も彼人に付て將軍の敵となりしかば尊氏彼の本領悉く沒收し給てけり然るを細  
川相摸守清氏頼宮が勇の譽高かりければ我少分の領内にて頼宮が本領式程與  
へてけり其後義宣の御代に至て清氏武家の執事として諸事を相計ひしかば此

事を申本領安堵を取成しかども彼所領の事尊氏卿より赤松則祐に軍忠の賞に  
取行しかば則祐故將軍の御教書有之されハ則祐が不義何事なれハ彼所領を召  
放されんやとて更に渡さゞりけりされども備前備中に有所の自餘の所領ニハ  
安堵してけり其上此十餘年か間彼是に付て重恩を與へてけり頼宮も清氏の高  
恩を以謝しがたくなんと傍輩にも語り事の次てハ清氏にも云てけり此故に  
清氏も二心ハあらしとおもひて本領若狭小濱城をも預けたりし然るに清氏將  
軍を怨みる事有て忽ち怨敵となり本領に橋籠る是に依て將軍諸國に仰せて征  
伐の事を命し給ふ爰に丹波より向ひし仁木三郎頼宮に親しかりければ密かに  
使を遣はして曲て此方へ御出有て忠を専らとせば本領安堵の外に清氏が領内  
にして貴方の望みの所三千貫を遣わすべしとぞ申入けり頼宮心に同しければ  
即御教書を申下して其上に備前國福岡庄を、則祐相渡すへきの則祐か自筆の  
狀有ければ頼宮種々謀を廻らしける清氏はをハ夢にも知らず尾張左衛門佐朝  
倉ハ敗軍を無念の事に思ひ其恥を雪かんと三千餘騎にて救賀へ向ひ頼宮ニハ  
五百餘騎を差添て城の留主居申殘しけるに頼宮夜に入て仁木三郎が兵三百餘  
人を城戸を開て清氏の郎從の四百餘有けるに使を以て申けるハ相州重代主君



將軍に奉對逆心の企有に依て今此亂出來にけり入たる者か、隠謀の無道に與せんや是義士の本意に非れ、某ハ將軍の御味方申也清氏近年の御芳志忘るに似たりと雖も各存のことく親にて候者より以來將軍を主に奉頼にて候何れ無道の逆臣に属して主を捨てんや旁の事爰にて討度候へども日頃の情を知らぬに似て候へば各相州の陣に歸りて此山を宣ふべしとぞ申ける清氏の兵ども兎やせまし角や有まどとおもふ所に伊木三郎丹波の勢を率して勢坂より下りければ内外の大勢に取籠られてハ叶はトと思ひ右往左往にぞ落行ける太平記 同理 並抄

頼宮次郎左衛門

備中兵亂記

毛利家の將士にて天正年中秀吉か平田の要害谷大膳亮を討取しより加陽郡所々に於て戦功有天正十年高山援兵又播州三木の城へ兵糧を納むる事其餘の記事合戦記に出して爰に略す

惣社宮社内鬼ノ城吉備津宮合祭

鬼ノ城より八田部に合祭の年歴不詳蓋延喜以後ニて新山より遷し奉る時供奉せしハ惣持院神宮寺別當と成て來り上下ハ新山菩提寺也此時に末坊山下して

神宮寺となる新山大宮司加陽右京亮法務清水次郎左衛門社務御前影三郎左衛門大江民部尉下道五郎左衛門大江三郎左衛門下道次郎下道太郎大江太郎下道彦太郎藤井安藝守親次郎等也 大江盛行記曰用明天皇二年吉備津社建立有孝靈天皇御夫婦を祭ると云惜むへし太古以來の舊地を廢し御木像を八田部に移し奉り社領も空敷成行しころ悲しけれ今惣社内陣に御本像ハ四尺計と三尺計と二座安置す貞享四年二月神宮寺古記曰御膳二外ニ膳八ツ三方膳と見ゆ鬼ノ城吉備津元宮を合祭する事明也吉備津ハ鬼の城本宮なれば大宮司の職分餘の吉備津に有事なきを見れハ其徵明白なり中津彦命の後孫大宮司ハ此新山にかざる也右大宮司加陽氏の遠孫元弘にハ延友と云天正ニハ定友と云此家をさして新山大宮寺と云也天正年間子孫斷絶すいと惜むべし加陽氏新山大宮司が一類經山清水丘に住するを清水氏と云御巡見言上案内云享祿年中清水主膳正範居住する由見へたり是も類族なるべし清水長左衛門宗治も惣社并宮内吉備津の社司代なる事ハ此故也元祿八年九月神宮寺池上越前同河内親但馬清水備後等郡奉行當名の願書を見し事有然ハ清水氏近來滅亡せるか神宮寺も此頃ハ別當職なるにや



沼田神鏡

社一間四方惣社社内に有天神と合殿に鎮座す延喜式載る所名神小と有ハ此神にや木像の側に古きこま大有 秀雄案徃古沼田名神の社跡今惣社境内に残れりアザナを尾野間と云田地有古ハ別社なるを合祭の時此地に遷すかど見ゆ惣社大明神

祭禮九月戌亥の日ハ吉備津社を移して後の例也鬼ノ城吉備津祭禮ノ日ナリ本社三間ニ四間其外幣殿 拜殿 末社

大神宮

祇園宮

辨才天

秀雄按 祇園宮辨才天ハ佛也是神宮寺別當たる事明白なり

天神 沼田社 惠美須 荒神 隨神門 廻廊等有境内二町六反除地別當神宮

寺本地堂御供所并石鳥居等有

秀雄曰今ハ別當を社僧とす然れ共神宮寺ハ御社境内隨神門の内ニ有池上大宮司ハ隨神門の外に有是古ハ社を専らにせししるし也元祿八年郡奉行へ出せし

願書に神宮寺を一番に書次ニ大宮司池上越前同河内親但馬と記したり社僧に非るの證明なり又社内に本地堂有是又社僧に非るのしるしか今の太宮司ハ天正中新山大宮司が絶せし跡を繼しを神人等今偽りて神宮寺を社僧とす抑神宮寺ハ新山を下りて以來の事なり且宮社に寺院を置事ハ聖武天皇の勅免桓武帝の御條にも載る如し神人の偽ハ信すべからず又ハ神の木像を安置す 八田部郷の内ニ國府と云地有是ハ彼所にもいひしごとく古しへ備中守に任ト此地に下向し國中の政事を聽し時此所に國中安全五穀成就の爲に祈禱せし舊地なり備中國内の神社三百二十四社を惣へ合して祭る故に惣社といへり此時奉て一國ニ惣社一郡に惣堂を祭り各本地を樂師とす

貞享四年水谷伊勢守殿より社領の事高十七石五斗神宮寺内を二石五斗大宮司二石八斗外ニ御供料壹石五斗と有徃古ハ八町四方の地賜はり何れの頃にや今の通り七石にハなりぬ文祿三年九月宇喜多秀家卿より寄附の書翰有別に出す其狀に窪屋郡西の庄の内にて七石の知行を寄ると有今窪屋郡西庄平田村名寄帳に惣社面と書來れり其故ならん此外古書六七通ハ池上多門義知所持す毛利治部大輔元清三村修理進家親桂内藏太夫太閤秀吉公北政所御妹長慶院より寄



進の狀等各別に出す

應永三十三年社造營有又慶長十三年再建(天正二年隨神門中島與介再建)御朱印三百石なりしが天正三年十二月六日迄其後百六十石に減し二通共に御朱印有と書す同十年宇喜多秀家毛利氏許す所の地悉く収納し宮社を放火す此時窪屋郡西庄の内にて七石とハ成たり

天正年中權中納言小早川隆景朝臣より寄附狀有其文ニ曰

惣社に爲祈念具足一領惣系 甲致寄進候能々可抽精誠候段神主ニ可被申渡候猶期吉事候恐惶謹言

七月廿四日

隆景 花押

清水長左衛門殿

國弘隱岐守殿

右清水氏代々神社附にして此時惣社社司代なりし故當名有子孫長州萩ニ有本文大宮司池上多門義知所藏

八幡大菩薩 西山と云所ニ有

岩清水勸請の故に菩薩號也 本社 拜殿 隨神門 石鳥居 社僧 本皓山法

滿寺 巫女壹人

惣社山神宮寺惠光院 惣社宮別當本尊大日如來 古しへ天台宗今古義其言宗開山年歴不詳蓋新山より下山の寺院成へし境内一反五畝三步 寺内ニ毘沙門の古作有 境内惣社宮の社内に在て別當なる事知るべし今ハ神人の爲に社僧と成たり貞享四年水谷殿への願書にも別當と書たり

惣社山正法寺舊跡 社僧也

開山年歴不詳代々相續して終に天正ニ至り滅亡す今其跡正法寺畑とて惣社北の鳥居の前に畑有て古墳等残れり

惣社山寶相坊舊跡 社僧也

正法寺寶相坊各惣社宮社僧也今廢寺と成其年歴不詳 或云 今の法滿寺寶相坊の跡を繼て寺號を改めたりといふ其實説不詳

廢寺 如常寺

應永三十三年の記及天正五年の記に出つ

同 正法寺

舊地田畑となる側ニ墓有今惣社宮の北鳥居前ニ畑の名残れり



西山 其邊をすへて西山と云山丘ひきくして東北より南西へ翔りし小山也  
豊臣秀臣公文書貳通足守藩小早川氏所藏寫畧之

井手村八郡郷 吉備國史同斷

高七百二十四石

法滿寺 千手觀音

蔭田家は其はトめ權之佐といふ太閤秀吉公の御時一萬石を賜はり恩遇せらる  
慶長五年石田三成秀頼公の御下知と稱して亂を起すに隨ひ中村式部少輔小野  
寺彌七郎と共に勢州安濃津城主富田信濃守信高を攻る此時蔭田家の臣青木丑  
之助一番乘高名し終に城を攻落し各此城を守る然るに關ヶ原の軍三成利を失  
ひしと聞てやがて此城を捨て身を隠す石田與力の輩悉く罪せられしかど蔭田  
家ハ子細有て本堵し徳川殿御家人の例になされ備中國加陽窪屋淺口三郡の内  
攝州熊野田村を賜ひ今に相續す

妙高山極樂寺

眞言宗本寺國分寺本尊藥師佛堂二間四方住坊二間ニ三間庫裏三間ニ七間境内  
年貢地九畝十步

鎮守三寶荒神

開山不詳されと應永三十三年惣社宮遷宮帳に出勤を被たり則年歴嘉永六年迄  
四百二十九年最古刹也

大光坊 本寺國分寺

眞言宗本尊阿彌陀開山不詳住坊四間半ニ二間境内五畝十九間

鎮守稻荷社

廢寺 東漸寺

國分寺末寺帳云畝數廿六步東漸寺畑と云側鎮守新宮三所權現社地十一間ニ七  
間社壹間四方此外藥師堂一間四方其事歴不詳

廢寺 赤堂寺

應永三十三年記ニ載之舊跡不詳

圓鏡山靈妙寺 井手村

眞言宗本尊藥師佛堂二間四方境内九畝三十一歩貢稅地搦所觀音堂一間半四方  
二間ニ三間年貢地

清水村 八郡郷 同名 近江愛智郡清水 信濃國更級郡清水 吉備國史同斷



高六百七十五石

古城 集成志ニ云城主清水備後守宗則同備後守宗知入道月清同長左衛門宗治高松城へ移りて後嫡子與右衛門宗重同田右衛門宗貞難波新助等居す慶長五年毛利領召上られてより落城す○慶長五年ハ關ヶ原の時也此節迄城有たると云いふかし

清水岡古城 清水主膳政範 享祿中落城と申傳右村の記録に出たり

清水備後守宗則傳

宗則ハ難波次郎經任十二代の後といふ一說紀州色川清水勘七郎の末にて平一揆と云又清水新藏人頼高の後にて源氏也ともいへど覺束なし經任が後といふも誠なるべく見ゆ加陽郡八田部の領主にて八千石を領知し世々清水に居せし故清水氏と名乗し也はトめ大内の麾下に有後毛利元就に屬し永正四年十一月將軍義植公御歸洛の時大内義興隨隨の諸將九州の嶋津を始め當國にてハ清水宗則其外庄爲資細川伊達福井石川三村以下泉州堺の津に至る  
陰徳記 翌五年の春都へ馳登り三好細川等と戦ひて戦功有天正十年七月尼子晴久毛利が藝州吉田城を取巻と聞石川二階堂の人々と猿掛城に至り關ヶ端を

切塞ぎて尼子が粮道を絶しかば雲州勢力及ばず引退く 中島兵亂記同十一年大内雲州を征せんと當國の二階堂氏行をはトめ三村野山以下彼地へ發向す其虛に乗し播磨の赤松晴政浦上宗景宇喜多興家等經山の城を攻む宗則王子が原へ出張し浦上右衛門大夫が勢といと三戦ふ清水か手より荒木兵衛片山助作土師孫十郎藤井與助等爰を専途と戦ひしかば浦上叶はずして敗走す三兵亂記弘治元年十月毛利元就逆臣陶隆房を誅せんと聞へしかば宗則はトめ三村石川二階堂上野細川以下石見國へ下着す元就對面して遙々の下向をねぎらひ去ても當國ハ赤松尼子細川三好の者共戦争の境目なれハ歸陣して守るべしといふ諸將答へて義興以來厚恩報謝しがたく候へばせめてハ吊ひ軍して逆臣殘黨に一箭射度ころ候へば矢戸善左衛門尉が相備へたる周防長門の國にて若山松崎石田岳勝山等の城攻氷上暁の合戦に各粉骨を盡し終に大内義長陶隆房等亡失ければ元就諸將の軍功を感せられ戦功の賞を賜ふ 兵亂記永祿三年元就石州を平均してより雲州へ攻入賜ひし時ニ宗則當國の諸將と彼の國に至り三澤三郎左衛門三刀屋彈正左衛門赤穴左京亮幸清等を攻降し赤穴に在城して雲州の城々過半毛利の手に屬せしめ 兵亂記陰徳記同四年五月播州浦上が守將備前龍



ノ口の最上治部備中勢を誘ひ討んとて却て龍ノ口を乗取られ自身も梶谷八兵衛ニ討れしかハ浦上宗景安からずおもひ龍ノ口を取返さんと攻掛たり城中乏敷既にこらへがたく見へしを宗則をはりめ石川中島上野高橋其外當國の諸將加勢して内外より攻はさみ敵あまた打取て浦上勢敗北す 兵亂記同七年七月浦上先途の恥を雪んと再び龍ノ口へ押寄る今度ハ宇喜多直家はりめ備前美作の勢一萬餘騎龍ノ口を十重廿重に圍んたり當國の諸將手分して一手ハ清水宗則に石川上野中島生石日畑上山等八千餘人辛川村より今岡山崎檜津等へ出掛け其外三方より敵の後へ押寄石川中嶋をはりめ味方も若干討れしかども必死に成て戦ひし程に敵も是にへきるきして終に諸勢を引上ぬ 兵亂記元龜二年尼子勢經山を攻る時中嶋大炊介時分ハよきと突て出宗則ハ惣社宮の側より千五百餘人を従へて尼子が後へかめいて掛れば敵前後の兵に取巻れ散々に敗走す宗則が勢逃るを追ふて百貳拾餘人を討取たり 兵亂記此外戦功數多なりといふ死年いづれの年なるや見る所なし

清水氏系 定紋 左三巴

難波次郎經任十二代

藤原宗則

清水備後守

女子 中嶋加賀守輝行室大炊介元行母

宗知

六郎兵衛 後備後守入道して月清と云  
庶子なる實家を不繼天正十年六月於高  
松城切腹、法名 覺水院岩屋月清

行宗

某

清水右衛門尉 清水勘左衛門 子孫長州ニ住す  
實ハ中嶋大炊介次男

宗治

清水長左衛門 始清水城主後高松城主所領八千石 天正十年兄月清入  
道と共に自殺 法名清鏡院水岸宗心居士長州にて高松院ト云始石川家



の長臣後に毛利の幕下と成

宗重

清水與右衛門

某  
清水與右衛門  
室ハ中島與介女筑前ニ住シ備中  
清水ノ家斷絶ニテ所領宗定ニ賜

女子

中嶋大炊介元行室

女子

堀喜左衛門室

女子

荒木太兵衛室

景治

清水源三郎 五郎左衛門

小早川隆景諱字を賜子孫長州ニ住し清水長左衛門と云三千石所領す

宗定

難波田右衛門

難波田兵衛跡相續妻ハ石井新右衛門女清水宗重筑前ニ至リしに依て備  
中所領宗定ニ賜ふ

宗忠

難波田兵衛尉 難波家相續兄と共に高松にて自刃

女子

池上孫兵衛室

宗定

難波田右衛門 實ハ宗治末子

天正十年高松落城後清水與右衛門宗重小早川に隨て筑前に下向し死  
す天正十一年清水氏備中の所領を賜慶長五年以後備前岡山ニ渡人す  
此子孫數多備前備中ニ有

宗永

難波新介 岡山住居子孫今ニ在母ハ石井新右衛門女



備中府志ニ宗治ハ高山の石川久式が長臣にて石川家没落の時忠義有に依て毛利家は是を感ト石川家數代の所領を宗治に賜りて高松の城主ニなさる先祖ハ源頼國の嫡孫清水新藏人頼高の後胤と云何の書に依て記せしにやいふかしく其頃石川家の所領を賜ふほどの人ならんには天正三年三村黨が合戦石川家没落の軍記などには有べきを其記にも見へざるは平川氏例の僻説なるにや按るに清水村の農民に清水氏の人今數軒有て宗治枝流なりと云宗治も此清水村の産にて地名を氏とせし成べけれども子孫長州に有事顯然たれば此所に宗治の枝流有事覺束なし但し宗治已前の親族なりけん

古松軒云古老の言傳へに宗治ハ形容美敷長高くして聲の大成人也と云子息ハ才太郎又源三郎ともいふ按に才太郎源三郎と變名せしが又兄弟かしらす妾服に女子も有貳人有しといふ山林に隠れ居たる領地の土民等宗治の死を聞劬哭して嬰兒の母を失ふがごとし是を以て見れば義勇のミならず又撫民の志し深かりし人也けん子孫毛利家に於て食邑四千五百石にて大夫たり清水入道月清ハ宗治別腹の兄也多病成故宗治に家を譲り入道す子息ハ左衛門尉宗清と稱し藝州に下るともいふ又由縁有て備前に止るともいふ其事詳ならず宗治兄弟の

室家もしれず近き明和年中長州毛利侯下道郡河邊驛御止宿有し時に備前岡山より清水某と名乗月清嫡孫也とて由緒書感狀等數通差出し抱へられん事を願ふされど御擧用なくて備前に住すとなり(兒島屋三郎右衛門と云者則備前岡山にて難波氏なり難波田兵衛の子孫といふ系圖書類有といふ)先年長州侯備前岡山御通行有し時京橋の上にて前のごとく書類を以て抱へられん事を願ふといへども御取用ひなく其晩藤井御止宿にて金百兩下されしを難波氏猶不足にかもひしこや侯御歸路の時を待て再び願ひしかども今度ハ更に御取上なかりしとかや此事嫁の兄なるもの先年予に嘶したりしが今此古松軒が筆記したりし吉備の下道といふ書に符合せり再び願ひ出せしは河邊と見へたり

清水山萬勝寺 惣持院舊跡 惣社社僧

往古惣社未國府の内に有し時より社僧と云惣持院と云其故なるよし正長元年惣社御造營帳にも遷宮導師惣持院僧正増忍御坊衆徒六十人供警固二百人を引連たる事を載たり是其證しなり

當寺舊記云讃岐與田虚空藏寺増呼僧正貞治年中來居し三重塔金堂經堂山門僧坊造立す末院八坊有云々 應永四年兵火に依て焼失し應仁二年又焼亡す其後



清水長左衛門菩提寺たる故足利義昭公へ訴へ祿四百貫を附す又私に五十貫を寄附す寶永年間住持増鐵惣持院を棄て國分寺舊地に移し改めて國分寺と稱し舊地ハ悉く野田と成宗治の墳墓のニ殘れり

秀雄云増鐵の後の僧いへらく國分寺惣持院元一寺にて國分寺を後惣持院と號する由云然れども此説誤れり國分寺は別の一寺にて其證増鐵碑文曰

備之中州國分寺和尚法諱増鐵別號興國賀陽郡八田部人也其先出赤松律師則祐之裔池上政則又曰政定幼少聰敏志釋門師事惣社別當増榮後提惣持院僧昌中略乞其法者成市矣夫國分寺者行基菩薩創立之舊跡空移廢墜是極和上深概奮再造土木功失之資乞貨四方既榮二十年遂移惣持之席諸堂巍然頗覆舊觀元文庚申七十歲栖隱堂移之菴裘寬延己巳年八旬玉積白爲萬〇使予記其始末傳之不朽銘曰功哉德哉 著明々斯 其壽藏〇 永保寺榮

寬延二年仲春國分寺現住沙門玉盤敬識

寶曆四年十月六日八十四歲寂

右之文ニ依て國分寺ハ行基創立にて元弘の亂に燒亡す惣持院ハ開山不知貞治の頃増呼僧正再興の地なり其別院なる事知べし

清水長左衛門宗治及月清入道之墓并清水山萬松寺惣持院之舊趾圖畧之

惣持院國分寺に移りし事ハ別ニ記す

八田部郷清水村の田の中ニ惣持院舊跡ニ古堂一つ有側に月清宗治二人の石塔有國分寺に在所の戒名清鏡院殿水岸宗心居士宗治 覺水院殿岸屋月清居士月清又高松中島村妙元寺ニハ高松院殿清鏡宗心居士元來清鏡宗心宗治 覺水月清月清なるを後世浮屠氏の色々に諡號せしもの也

日昭山南坊 元來惣持院八坊の内

古義真言宗 國分寺末寺 本尊愛染明王 住坊二間ニ六間本堂一間半四方境内東西十

間南北九間田八反三畝

鎮守天神宮二尺ニ三尺

日照山萬福寺 元來惣持院八坊の内

古義真言宗 國分寺末寺 本尊地藏尊 住坊三間ニ八間境内四畝二十步田畑八反



備中誌加陽郡卷之十三

八部郷

金井戸村 大古海面にて新開の地也

高三百八十一石 吉備國史同斷

金井戸 古しへ帝王常國にましますける時此清水味ひ宜しきとて黄金を井の底へ入て帝へ捧けしかは金井戸とハ名號しと云

國府 和名抄 加陽郡ニ在行程十九日下五日

北國府昔しの屋敷跡とて少しの岳三反計りも有へし藪なども有また内堀などいふ字の田有古しへ國守の居賜ひし時の遺跡なるへし里人其地を呼て御所の内と云又溝手村に國府殿田と云名の田殘れり

天神社 菅廬を祭る 傳へ云貝土氏安原氏勸請也

本社三尺計り 拜殿 石鳥居

國司

日本紀成務天皇五年國郡立造長縣邑置稻置云々此の時諸國の首長定まり封建の制に倣ふて國々に國造を置れ祭政を兼司との給ふ



是より以前神武帝の時より國造の名も見へしかどもさわかには國々の首長を定め給ひしハ此時をはしめとす委敷ハ國造の條ニいへり  
孝徳天皇大化元年郡縣の制度となり國司を命せられて専ら政事を司り國造なして祭祀を掌らしめ是より祭政二岐となる

國司久邇乃美舉毛知と訓す國宰亦同し蓋持命之義言御命自天朝降也と日本紀通鑑に見ゆ國司の名是より先日本紀仁徳帝六十五年飛彈國司奏賊宿儺之事又遠江國司表して上言す云々是國司に見へし始也それより後雄略紀及崇峻紀河内國司見ゆ又推古紀十二年聖徳太子十七憲法ニ國司國造勿欲百姓云々は國司國造並稱せし始也職原抄云上古以國守皆云國造至皇極天皇時始改國司歷代皆云國司至文武天皇改國司爲國守云々此說何の書に據たるや日本紀皇極帝の朝國造を國司と改る事見へす蓋誤也

さて國造ハ官祿を世々にし給ひしか國司ハ年限有て交替す其事次ニいへり於是國司ハ威柄加はりて國造を率ひ國造ハ勢ひ微にして郡領に補せらる平治以降王室多難源賴朝恃功貪權乘機弄威奏請置守護地頭於諸國於是國司之權移歸將家漸復爲建國然守尉非王人鎮制仍戰國雖規模相似而其去古也遠

矣 百寮訓要鈔云諸國七道の官是を外官と云大國上國中國小國あり諸國の守は受領と云也國司の事なり當時の守護人のことし當任は四ヶ年也よき國司をば重任とて重て又四ヶ年をたふ又延任とて任を延らる、事も有皆能國を治め賢者の聞へ有者をは重ねて年を延らる、也わろきをハ早くかへ一任よくかへざる儲ころ國も治まり賢名有をハ賞せられし也昔ハ一國の管領する人殊更賢を貴みしハ此役也勘濟公文と申て年貢を能沙汰しつれば抽賞せらる悪く沙汰したる人ハ長く任官などを止めらる事も有と云々

天平寶字二年十月勅云頃年國司交替皆以四年爲限斯則足勞民而已未可以化自今以後以六年爲限

諸國を大上中小の四等に分つ備中ハ上國に列す故に上國の例を左に擧て餘ハ畧之 職員令云

大國ニハ大椽少椽大目小目あれとも上國以下ニハ無之  
守一人 介一人 椽一人 目一人 史生三人 延喜式作四人  
大穀一人 小穀二人 主帳一人 杖尉五人 槐師十人  
隊正二十人 博士二十人 醫師一人 學生四十八 醫生減五分之四 健兒五十人



右の外國府に在て守に隨從する者少からず介以下の諸吏も單身にあらず各護衛供給の人も有へければ官署私宅是に副ふへし又郡別に大領一人少領一人主政二人主帳二人有又軍團一千人有是等の輩十一郡より事に從ふて來集すへし又孔子廟及國學あり延喜式雜式五十 諸國釋尊式云々 乙ハ延喜式に出せるま、今畧之

又國々兵庫と云もの有て兵器を貯ふる貞觀八年九月七日美作國言兵庫鳴聲如鑼鉦鼓同十三年壹岐國兵庫鼓鳴同年佐渡國兵庫震動凡兵庫之事諸書に多し又甲斐の兵庫も鳴動せし事有其サマ微少ナル物トハ見ぬす

孝徳紀大化二年正月遣使者詔郡國修營兵庫といふ事も見ゆ

官職秘鈔曰上國有權守權介權椽云々又近江越前丹波播磨美作備前備中備後周防伊豫讃岐爲參議兼國此外或爲宿官爲他人兼國又以別進成功者任之

職員令

守 上カミ也國中ノ上ニアル國司也 掌下神社戶田簿帳字養百姓觀課農桑糾察所部貢舉孝義田宅良賤訴訟租調倉廩徭役兵士器仗鼓吹郵驛傳馬烽候城牧過所公私馬牛關遺雜物及寺僧尼名籍事

介 マスケ也守マスケル官也守ノ次也 掌同守

椽 丞ハ音也訓ニアラス此セウトヨム故四分配當ノ允椽ナトセウノ音ナケレトモ持セウトヨメリ丞モマスケル也介ニ次テ守マスケル也目附也

大椽小椽アリ 掌下糾判國內審署文案勾稽失察非違

目 佐官也モマスケル官也椽ノ次也大目小目アリ 掌下受事上抄勘署文案檢出稽失讀申公文

祐筆也

史生 下祐筆也

續日本紀光仁天皇寶龜六年三月己未初置備中大小目員

職原鈔云守 相當 從五位下 介 有權介 從六位上 椽 同上 從七位上 目同上 從八

位下

職原抄云

權守者近代多是遙授官也同首書云文武天皇時始置守介椽目之官但是時無權官後代置正權大略遙授也正者居其國執政務權者其身居京師以爲兼官謂之遙授也

國司役割方譬へハ二萬石の所ハ一萬石京へ上せ一萬石國に止む此止めし一萬石を十六割



守六分 介四分 様三分 目二分 史生一分 是を一分の官と云又一分召とも云也  
國守の身上ハ土佐日記等に見ゆる處至極人少き物ニ見ゆれと朝野群載國務條事  
の中に

可以公文優長人爲目代事

諸國公文目代必少優長然則不論貴賤准以堪能人可爲目代公文未練者勸濟公文之  
時並前後司分付之間極以不便也事畢之後搔首无益

不可用五位以上郎等事

五位有官郎等是不治之根本也雖張行惡事位爲有位之者強不能抑屈内搔首外雖強  
制逼雖令諫知能無信受縱雖近親一切停止此事有可願之人者別給出產物耳

可隨身能書三人事

能書之者爲受領要須也其用太多不得忘却

可隨身堪能武者一兩人事

時勢之体弓箭不覺之者皆弓新武者料日難強武威遠有何益乎抑良吏之治雖不可用  
者人心如虎狼自非常之事必要須也可尙優國人又無詮者也  
可隨身險者並智侶一兩人事

人之在世不能爲爲之國致祈禱爲利作護持

福山志料今按云是によれば郎等能書武者險者智侶等皆國司の用に供すといへ  
とも令ニ載たる介以下諸員とハ別にて國司自從へ行と見へたり今昔物語に實  
方中將陸奥守になりて其國に下りけるに國內の者とも此守を饗應して晝夜館  
の給仕怠る事なかりけり其頃平維持と云者有藤原諸任とよしなき田畑の事  
を争ひ各守に訴へけれとも何れも一理有上二人共に然るへき者なりければ是  
非を分ちかねておわしける内國司ハ三年と云に失けり後ハ憤り彌増になりて  
合戦の用意頗也と云維持ハ余五將軍にて平貞盛か養子諸任ハ俵藤太秀郷か孫  
各軍兵二三千を左右す彼等か勢力にさへ國司を擲る所有を見れば其光景想ふ  
べし

藤原園人傳

爰にひとり園人の傳を舉しハ國司郡司選任の体はた勅詔の趣を記して當時の  
有さまを伺ふか爲也

日本史列傳云藤原園人中衛大將房前孫大藏卿楓曆長子也 公卿補任實龜末叙從五位  
下爲美濃介天應元年移備中守延曆初歷少納言右少辨安藝備後守爲大宰少貳既



而為豐後守 繼日本紀 遷大和守入為右京大夫所在著績為良吏百姓追思為立生祠  
 稍遷治部太輔右大辨大藏卿兼相撰守大同元年轉宮內卿任權參議遂為真兼皇太  
 弟傳累正四位下勳二等為山陽道觀察使 公卿補任 奏曰西海道年中上都雜使其數  
 繁多而此道疲弊異於他境檢察其由率緣迎送無息不得顧私望請西海道五位以上  
 自非秩滿解任者不聽輒入京勅許之 類聚國史 三代格 二年又奏曰備前國解備書生等  
 言已等白丁課役之民而長直公事不顧私業或久經京下永妨農業或巡行部內私費人  
 馬身勞不異郡司榮祿還無所賴伏望特告官司借貸正稅各救窘乏國司勸之事有合矜  
 仍請使裁使等商量賞則招人餉則聚魚若不優矜則部內公文將託誰人望請當道諸國  
 隨國大小正稅一萬二千束已下八千束以上每年借貸令自勸勉救宜差量給之若有未  
 納令國司填之立為恒例畿內七道諸國亦宜准此 三代格 又上言播磨國內封戶巨多運  
 租之勞於民為弊加以界近都下雜用繁多動用數額不足支用不動之時只九萬斛熟尋  
 其原山封戶之數多也伏望減省春宮坊並諸寺封五百戶移附東國即收其租以為不動  
 然則弊民斯息貯物自積許之三年奏當道播磨備前備中安藝周防等五國去延曆四年  
 以降二十四年已往庸並雜數等欠負其數不少良田頻年不稔人民凋弊也今將追辨本  
 色國司則或死或替弊濟難成百姓則且病且飢運進大難伏望欠負之物一收額稻混合

正稅庶於公無損於私得便但任觀察使以來一依舊令辨進許之 類聚國史 是歲轉民部  
 卿行北陸道事 公卿補任 四年奏言伏按去四月二十八日詔書備大肆以下罪無輕重常  
 赦所不免咸皆赦除去者非常之恩率土幸賴凡厥大小誰不霑澤方今當道諸國損弊年  
 久公途難辨當時宰吏或有欠負雜物檢忘則罪遂赦降勸物則責在貧民便付後任遷移  
 前容相續催煩輸轉不絕准之事由元非數倍比之在法輕重自分伏望大同元年以來關  
 庸雜米等未進者官用有限支料煩乏並須依教催進自餘雜物未納未進之類在於恩詔  
 之前者悉從免除庶使窮困人民永忘舊歲之責見任國司頓絕前官之怠許之其京畿並  
 諸國准之 類聚國史 累進正三位中納言弘仁元年轉大納言 公卿補任 奏言謹按去延曆  
 十四年閏七月初日敕減諸國出舉正稅息利率十束收利三束山之觀之矜百姓之罄  
 乏惜時俗之弊衰也大同之初改張此例更率十束收利五束爾來迄今彫損滋甚水  
 旱疾疫頃年相仍僅賴今歲之豐稔少慰先時之菜色然而窮困之民未得興復備續之  
 煩當從輕勘伏請論定公解及雜色稻出舉息利始自今年一依延曆十四年勅行之庶令  
 改重從輕濟弊招益勸許之二年奏言夫郡司有勞之胤奕世相承郡中百姓長幼託心臨  
 事成務實異他人而偏取執業未絕譜第用庸材之賤下處門地之勢上為政則物情不從  
 聽訟則決斷無仗於公難濟於私多思望請郡司之擬先盡譜第遂無其人後及執業詔應



變設教為政之要樞商時制宜濟民之本務故昔堯舜異道而天下歸仁湯武殊治而蒼生  
 欣賴朕還淳返朴之風未覃下土興滅繼絕之思常切中樞夫郡領者雖波朝廷置其職有  
 勞之人世序其官逮于延曆年中偏取才良未廢譜第宜依來奏明年又奏夫量能授職邦  
 教欣先訓俗宜風郡司是寄故任當其器則庶賦咸康委失其才則政治自亂加以譜第之  
 事既復舊例奕世相繼義在象賢是以國司簡定詮擬上言無賴之徒不領擬之例或身在  
 京爭第相告抑遏國選遂奪其位二民之志未有推服百里之任何能可堪臨事面增操刀  
 傷錦其之為弊古今一揆望諸銓擬郡司一依國定若選非其人政蹟無驗則署帳之官咸  
 解見任永不叙用以懲將來救依奏但主政帳不在此限三代格三年為右大臣公卿補任  
 四年奏念舊酬勞賢哲遺訓重生愛命貴賤無殊今天下之人各有僕隸平生之日既役其  
 力病患之時即出路邊無人看養遂致餓死此之為弊不可勝言伏望布告京畿早從禁止  
 庶令下路傍無天枉之鬼天下多終命之人救宜令加禁制猶致違犯者五位已上注名奏之  
 六位已下不論廢贖決杖一百臺及職國知而不糾及條令長國郡隣保相庇不告並與同  
 罪勝示要路分明知類聚國史五年進從二位公卿補任奏去大同二年停正月二節迄  
 于三年又廢三月節大概為省費也今正月二節從于舊例九月節准三月去弘仁三年已  
 來更加花宴准之延曆花宴獨剩比之大同四節更起顧彼祿賜庫貯聲乏伏望九日者不

入節會之例須臨時擇定堪文探者下知所司庶絕他人之望省大藏之耗又奏去延曆十  
 年車駕幸交野此時禁畿內國司獻物而比年間曾無遵行寄言貢獻還煩百姓不穩之議  
 相繼無息伏望自今以後一切禁制但臣下之志私有供進者不在禁限許之類聚國史  
 又奏諸國所收官物本倉色目共注稅帳而國司或非其人有便稍即充公廉當土百姓  
 不注舉給遠授他郡徒疲往還是以下便之處物數有剩至干交替通計諸郡名無  
 欠失實與帳違積習成俗其弊未改出雲國最多此類從令甲郡應貯而納乙處狂賊作  
 亂還致失火帳注全倉物既灰燼公家之損莫過期甚伏望自今以後下知諸國依帳收  
 納甲乙之郡不許通計若本倉相違准狀所科庶令官家少損黎民濟急類聚國史八年奏  
 依太政官延曆十八年四月十三日符殘內五國郡司一居內為率由近接都下騙策殊甚  
 准於外國不可同口今如此策未出身前相競如林既得者後詐告病假兆管關乘郡務誠  
 是欺犯朝章伏望自今以後有斯類者國司勘實一從還本若有國司受被賄托輒解却者  
 准狀科附不從寬典庶遏奸源以勵後進敕並許之三代格九年薨年六十三帝甚悼惜遣  
 使監護喪事贈正一位左大臣稱山科大臣日本紀略嘗奉敕與萬多親王撰姓氏錄  
 子濱主從四位下安藝守續日本後紀

軍國



大教 掌檢校兵士充備戎具謂充備兵士之戎具也 調習弓塲簡閱陣列謂隨軍行之陣列也 事

小教 掌同大教

令義解所載

凡軍團大教領 一千人 按一千人ハ一所ニ屯するに非ず爰彼所に置しなり

小教副領校尉 二百人 槓師 一百人 隊正 五十人

又國司每年孟冬簡閱戎具戎具者國內性隨身弓刀劍等類

昔ハ兵を農間に寓すとて本有時ハ農を兵としつひに平日に多く置さる也是ハ唐土も日本も同じ後世兵農二途となる事は又唐土も同事也因て昔の武員少きを想ふへし前の軍團も多くハ農に寓せる事しられし

續日本紀卷二十云天平寶字元年古者治民安國必以孝理百行之本莫先於茲宜令天下家藏孝經一本精勤誦習倍加發百姓間有孝行通人鄉閭欽仰者宜令所由長官具以名薦

同書卷十云聖武天皇五年八月壬申太政官議奏改定諸國史生博士醫師員非考選叙限史生大國四人上國三人下國二人以六考成選滿即與替博士醫師以八考成選延喜式諸國史生者大國五人上國四人中國三人下國二人但遠江美濃讚岐等准大

國甲斐出羽安藝周防紀伊等國准中國土佐准上國若狹佐渡等國准下國並不得任當國之人

按史員令に載たると同じからす世移り時替りて次第に多事と成故官員所職等も損益有へし然れ共其大概を三るへし

國書云凡諸國博士醫師解任之後既進解由者各選本司令熟本業各注上日毎年申省與考者望更任者聽之不勞覆試其被試及第既任遭喪者不待服關復任藥生接侍醫師任者亦准之 其秩滿任解之後更任者亦同此例但不經課試者不在此限

凡諸道學生才學頗長其道博士共舉為諸國博士醫師者雖非奉試及第皆為受業自餘為非業

凡明法生課試通六七條者任國博士

凡藥生等雖不奉試而習合藥療治者侍醫等共舉申省任國醫師

凡諸國權史生博士醫師遷任非依讓相代之輩其籤符任所遺歷

凡諸國受業博士醫師補任解文非籤符名下注各本業

凡諸國史博士醫師籤符外記勘會補任帳明知其補申然後請印

日本書紀卷十二履仲天皇四年八月始之於諸國置國史記事遠四方志



弘仁式卷十三射手親玉已下五位已上調習之資國健兒備中國五十人  
職原鈔首書云諸國建學校博士一人讀經籍守以下子若孫或親屬或凡民俊秀者入  
學校而習之其傍建孔子廟春秋二仲釋奠

延喜式兵部式 健兒 五十人 器仗 甲四領 橫刀十口 弓二十張 征箭二十具 胡  
籙二十具

右每年所造具依前件其様仗者色別一箇附朝集使進之

右の外又講師讀師など云者を任に下されて講説をなさしめらる講師未下らさ  
る間ハ國分僧より撰ひて代らしめ講師ハ國分僧の次第を以て爲さしむと見ゆ  
れば寺にはのらす其役所また國府の邊にあるへし福山志料

右諸書引所を見て當時の政教をうか、ひ亦國府村其かミの光景を想見るへし  
眞淵翁ハ國々に國分寺有て其住職を講師といひて其國の僧尼の司なり云々  
續日本紀養老三年七月始置按察使但此時諸國附之令備後國守大伴宿奈磨管安藝周防二  
國其所管國司若有非違及侵淫百姓則按察使親自巡省量伏黜陟  
陸奥出羽ハ大國ナル故鎮守府有テ猶別ニ按察使ノ府ヲ建ラル  
同五年八月以隱岐隸出雲按察使備中隸備後按察

福山志料按 按察の官此時始て置るれとも國司の中にて兼たりと見ゆ職掌も  
上に云々せることし又大日本史天長元年良岑守世奏今國守者古所謂刺史也  
當任之人不可多得伏望令一良守兼帶數國小大之政一從其所請一二僚屬亦依  
請任之天祿不厚則人不可勸也人不可勸則治不立矣請其公解攝國之中擇其殷阜  
地以二守祿並給之法宣試於一國明知治否然後令兼之云々  
是等に據時ハ一國時として隣國より兼る時ハ守なくして介以下のニ有しな  
るへし

同書天平三年十一月多治比真人縣守爲山陽道鎮撫使

志料今按此官も始て此に見ゆ皆國の守介の治否を觀せしむる成へし此類ハ  
敷國に有事國守の如きにはあらず職原抄參考に國々に府を開くと云ハ非な  
り

同書天平十六年九月大伴宿禰三十爲山陽道使判官一人主典一人

按是また按察使のことく諸國の可否得失を巡察せしなるへし

同十八年四月參議大伴宿禰中養爲兼山陽道鎮撫使天平勝寶六年十一月任巡察  
使阿部朝臣毛人爲山陽道使道別錄事一人



天平寶字二年正月以藤原朝臣倉下磨爲山陽道使錄事一人  
 同四年正月以右少辨布勢朝臣人主爲山陽道巡察使  
 天平神護二年九月藤原朝臣雄田磨爲山陽道巡察使  
 寶龜三年九月大伴宿禰潔足於山陽道分頭獲損判官一人主典一人  
 文武天皇大寶三年正月遣穗積朝臣老于山陽道錄事一人巡省政績申理冤枉  
 備中守介之事

今按に神武天皇高島宮に坐し舟楫を備へ兵食を蓄東征し給ひてより後國造定  
 り國司任せられて本州を治め給ひしなれども往古の事ハ國史に載されは不詳  
 彦五十狹芹彦命西道將軍に任し給ひし夫より稚武彦命吉備兄彦皇子吉備武彦  
 命御友別等此國に住給ひしとハ見ゆれ共其治ハいかなる所官なるや又浦羅別  
 鴨別稻速別仲彦弟彦など國造となし給ひしかと是も後の天平寶字元年上道斐  
 太都かこどく吉備國造といふにはあらずは一圓に領し給ふにもあらず又笠  
 臣祖縣守吉備臣屋代弓削部虛空下道臣前津屋部直赤尾海部直羽島吉備臣小  
 梨海部直難波吉備魚主此人々仁徳より欽明敏達の間に見へたれと或ハ國造の  
 後も有へく或ハ大領少領などにて國司の名聞へず漸一郡一縣を領し賜ふ程の

人々成へければ是はた惣國を管し給ふにあらず

國造の事ハ別卷に擧たれハ今贅せず

日本紀天武帝八年三月吉備太宰石川王病之薨於吉備云々續日本紀文武天皇三  
 年十月眞廣參上野朝臣小豆爲吉備惣領

福山志料に太宰惣領其職掌知へからず吉備中後を併せ司り守介の能否を察  
 せられし事大寶三年穗積の老を山陽道に遣わして政績を巡省し冤枉を申理  
 せし類なるへしといへど覺束なし仁明紀陸奥出羽太宰見ゆ國司クノミコ  
 トモチと訓す國宰亦同し九州を惣管するを太宰云々と云ることく吉備惣管  
 の稱成へし又郡領大領少領など云領ハチサムル也スブル也今諸侯を領主と  
 いふことく是も吉備三國を惣へ領すといふ心にて惣領といひしなるへし  
 是吉備の國に於てさはやかに其惣管の始て國史に見へし所也又元明天皇和銅  
 元年三月從五位上多治比真人吉備爲備中守廢帝天平寶字三年五月外從五位下  
 茨田宿稱牧野爲備中守是本州守介の任せられし始也令國司年限四年とあ  
 れは是より先にも交替有たるかとも思わゆるれとも天武八年ハ未だ三備分れさ  
 る以前にて太宰石川王見へ同十二三年の間に三備と分れ夫より十六年を経て



文武帝三年吉備惣領に任せられ又九年有て和銅元年備中となさるを見れば是を此國の守の始として是より前にハ備中守に任せし人ハあらしと思わる、也郡司ハ大領小領にて國司に對して一郡を司とれば郡司といふ郡領といへるも此稱なるへし往古國造祭政を兼て國々を司りしに後世になるに従ひて次第に多事なる故國司を補して政を執しめ國造ハ専ら祭祀に預りしかハ威權彼に屬して國造ハ自ら衰へ孝徳天皇大化元年郡縣の制度に定められて國毎に國司を置一郡毎に大領小領主政主帳などの職を居られて其大領小領ニハ多く國造をして任せられし也

延曆詔曰國造郡領其各異職自今以後不得令國造帶郡任 三代格 弘仁二年詔に夫郡領者難波<sup>孝徳</sup>朝廷置其職有勞之人世序其官と有て猶前かたにも有たるなれと此天皇の御時ハ何くれとなく天下の制度を立られしからかくさわやかに記されたり

政事要畧云郡領者今之縣令也親民行化實在斯人

職原首書云昔者每一郡有大領小領主政主帳曰之郡司今如郡代

職員令

大領 掌<sup>下</sup>撫<sup>養</sup>所部<sup>二</sup>檢<sup>一</sup>察郡領<sup>二</sup>事<sup>一</sup>

小領 掌<sup>同</sup>大領

主政 判官也掌<sup>下</sup>糾<sup>判</sup>郡内<sup>一</sup>審<sup>署</sup>文案<sup>二</sup>檢<sup>出</sup>稽<sup>失</sup>讀<sup>申</sup>公文<sup>二</sup>事<sup>一</sup>

主帳 佐官也掌<sup>下</sup>受<sup>事</sup>上抄<sup>一</sup>勘<sup>署</sup>文案<sup>二</sup>檢<sup>出</sup>稽<sup>失</sup>讀<sup>申</sup>公文<sup>二</sup>事<sup>一</sup>

國司ハ京より下されて年限有て交替すれと大領等ハ其職を世々定められしにて續日本紀和銅十一年五月甲寅詔曰諸國郡司徒多員數無益任用侵損百姓爲盡實深仍省<sup>二</sup>舊員<sup>一</sup>改定大郡大領小領主政各一人主帳二人小郡大領主政各一人中郡大領少領主帳各一人下郡も亦同し小郡にハ大領主帳各一人と見ゆ又官職秘抄ニハ大郡大領小領各一人主政主帳各三人上郡ニハ大領小領各一人主政主帳各二人中郡ハ大領小領主政主帳各一人下郡ニハ大領小領主帳各一人小郡ニハ領主帳各一人と有て史員令と同しからず世移りに時替りて次第に多事成故官員諸職等にも損益有しなるへし然るに日本逸史ニ延曆年中世官を廢し才良を舉て大領小領に補せられしか嵯峨天皇弘仁年中又舊例に復されて譜第を以て任し給ふ

三代格又藤原園人傳 日本史 曰弘仁二年奏言夫郡司有勞之胤奕世相承郡中百



姓長幼託心臨事成務實異他人而偏取執業永絕講第用庸材之賤下處門地之勞上  
為政則物情不從聽訟則決斷無仗於公難濟於私多患望請郡司之擬先盡講第遂無  
其人後及執業 詔應變設教為政之要樞商時制宜濟民之本務故昔堯舜異道而天下  
歸仁湯武殊治而蒼生欣賴朕還淳返朴之風未覃下土興滅繼絕之思常切中樞夫那  
領者難波朝延置其職有勞之人世序其官逮于延曆中偏取才良永廢講第依來奏  
明年又奏夫量能授職邦教欣先訓俗宣風郡司是寄故任當其器則庶蹟咸康委失其  
才則政治自亂加以講第之事既復舊例奕世相繼義在象賢是以國司簡定銓擬上言  
無賴之徒不領擬之例或身在京爭第相告抑遏國選遂奪其位一民之志未有推服百里  
之任何能可堪臨事面墻操刀傷錦其之為弊古今一揆望請銓擬郡司一依國定若選  
非其人政績無驗則署帳之官咸解見任永不叙用以懲將來救依奏但主政帳不在此  
限云々

朝野群載 補郡司官符

一擇吉日可度雜公文由牒送前司事

自餘公帳隨國例耳次巡檢諸郡搥穀類及雜官含有五行什器等若有不動穀者依丈  
尺高勘之其動用穀者籍弁土石以實受領次勘官舍

神社學校孔子廟堂等祭器國廳院共郡庫院館厨家及諸郡院別院騎家佛像國分  
二寺堂塔經論等

玉石雜志四篇ノ卷三ニ云國司今年某國の守に任し其國に下向し國府に住し國  
政を執行し正税チンゾウを運上し介椽目史生と公解コクヘを配分し時を以て國中を巡行し但  
馬國天平九年の税帳に國司巡行所部一十一度と有まづ春秋二度出舉官稻イナカソウ巡行  
といふ事有是ハ目史生醫師にて巡行す又觀風俗并問百姓消息巡行と云事有檢  
校由祖巡行と云事有為穀類稻巡行と云有檢校庸物巡行と云有收納當年官稻巡  
行と云有守目史生も巡行する也守の巡行に將從三人目ニ將從二人史生ニ將從  
一人すへて上下九人也此巡行に日別に守目史生にハ稻四把を充らる今量の一  
升四合四勺也此外に守と目ニハ酒壹升今の九合六勺搥貳勺を充られ史生には酒八合今の  
七合六勺搥貳勺を充て將從にハ搥一勺五撮を給す守の將從三人と有を以て其行裝  
も推量るへし國中の成敗を司るか故に國司といふ上に受て領するを以て受領  
と云

因云同書ニ載眞田一德齋二百騎の隊と甲陽軍鑑に見ゆれば千九百貫を四倍  
して七千六百貫と知れり信州の地位ハ平均一貫四俵の法に當るといへば七



千六百貫ハ三萬四百俵に當る眞田房州の譜に小縣三萬八千石餘ハ本領ト有是成ヘシ

三萬四百俵を四ツに割て七千六百俵ハ千九百貫なり二貫ハ八俵三貫ハ十二俵三十貫ハ百二十俵と知ヘシ

上古國司巡部之圖畧之

國司守介之次第

前に記せる如く天武帝より以前ハ國司の名も一定ならず是より後制度次第にくわしく成りて守介掾目の任に置れ國府また別府等に在廳して其國を沙汰せし事職員令に記せしかことく然るに後年に及びて參議の人兼任せる時ハ介掾の人は是に代りて備中守の任をは兼掌りし也されば安徳帝の頃迄ハ兼任たどへ逐授にても其位田を賜ひ其國治まらされハ其科をも受る事と見ヘたり後鳥羽院文治二年源頼朝卿天下の惣追捕使と成て始て國々に守護を置郡郷に領家地頭を居給ひしより守介の制一變して公家の國司ハ次第に衰へ武家の守護ハ盛んになりて往昔國造と國司とのことしたまたま伊勢陸奥などわつかに残りて鎌倉以後國司の守護多くハ空名と成たりぬされと次ニ出せる次第ハたとへ空

名の時の名目なりとも彼足利以後陪臣家奴私に守介と稱するに同からされば暫く擧て點綴するものなり

天武天皇朝

吉備國守 當麻公廣島

天武帝元年六月爲樟使主盤手被殺日本書紀

吉備太宰 石川王

同帝八年三月己丑病之薨於吉備天皇聞之大哀則降大息云々賜諸王二位日本書紀

文武天皇

吉備惣領 眞廣參上野朝臣小足

文武帝三年十月己未爲任續日本紀

元明天皇

備中國 多治比真人吉備

和銅元年三月爲任續紀

元正天皇

養老三年七月庚子播磨守從四位下鴨朝臣吉備磨管備前備中美作淡路四ヶ國續紀



聖武天皇

備中國司從五位下勳十二等石川朝臣賀美

風土記天平六年備中國司石川朝臣賀美云々萬葉緯引<sub>二</sub>仙覺萬葉注釋風土之記<sub>一</sub>  
案續記不載之不審

備中守從五位下息長真人名代

續記天平十年八月乙亥任備中守

備中守粟田朝臣馬養 從五位下

續記天平十九年十一月丙子爲任

孝謙天皇

吉備國造 從四位上上道朝臣斐太都

天平寶字元年閏八月癸丑爲任 續記

備中守從五位上藤原朝臣魚名

天平寶字二年三月乙卯爲任 續記

天皇大炊

備中守 外從五位下茨田宿禰牧野

天平寶字三年五月壬午爲任 續記

備中守 從五位下藤原朝臣細麻呂

天平寶字三年十一月丁卯爲任 續記

備中守 從五位上道守王

天平寶字七年正月壬子爲任 續記

備中守 外從五位下葛井連根主

天平寶字八年正月己未爲任 續記

稱徳天皇

備中守 從五位下石川朝臣真人

備中守 從五位下阿部朝臣草麿

神護景雲二年二月癸巳守介爲任 續記

光仁天皇

備中守 從五位下文室真人高島

寶龜元年八月辛亥爲任 續記

備中守 從五位下藤原朝臣中男麿



寶龜三年四月庚午爲任

備中守 大中臣朝臣繼曆

同五年三月庚申爲任

備中守 從五位下大神朝臣末足

同七年三月辛卯爲任

備中介 外從五位下阿部志斐連東人

備中守 從五位下藤原朝臣國人

天應元年五月癸未爲任 續紀

桓武天皇

備中守 從五位下榮井宿禰道形

延曆二年二月壬申爲任

備中守 從五位下紀朝臣安提

同六年二月庚申爲任

備中介 從五位下下毛朝臣年繼

同七年二月甲申爲任

備中守 從五位下美岡田

同十年正月癸未爲任

備中守 菅原清公

年月不知 菅原古人男也 大系圖

平城天皇

備中守 從五位下藤原朝臣諸王

大同元年正月廿八日爲任 日本後紀

備中守 從五位下安陪朝臣直勝

同三年四月八日從五位下陰陽頭兼備中守安陪朝臣直勝兼治部太輔先官如元

同四年二月十三日爲大學頭備中守如故 後紀

嵯峨天皇

備中守 藤原朝臣冬嗣 閑院左大臣

弘仁元年正月從四位下備中守藤原朝臣冬嗣云々此歲七月轉美作守 大系圖

備中權守 藤原朝臣眞夏

同年九月十五日參議正四位下陸奥出羽按察使兼伊勢守藤原朝臣眞夏解任左



降備中權守六ヶ月云々 日本後紀、公卿補任

備中守 參議正四位下左近衛中將巨勢朝臣野足 後中納言正三位

同年十月二日兼任之 公卿補任 後紀

備中守 參議從四位上左兵衛督秋篠朝臣安人

同二年七月廿三日兼任之本官如故 同上

備中守 從五位下藤原朝臣廣敏

同三年正月十二日守介任之 後紀

備中守 從五位上大中臣朝臣智治曆

同四年正月四日任之 後紀 類聚國史

備中介 陰陽頭從五位下小野朝臣諸野

同五年七月廿六日兼任之 日本後紀

備中守 從五位下坂田朝臣弘貞 後陽南淵朝臣

同十二年正月為任 公卿補任

淳和天皇

備中守 從四位下治部太輔文室真人弟直

天長元年為備中守同三年轉播磨守同七年閏十二月卒年六十一歲太宰大貳從四位下與岐男也 類聚國史卷六十六

仁明天皇

備中權守 從五位下藤原朝臣春津

承和元年從近江權介轉備中權守 三代實錄

備中守 文章博士從五位上春澄宿禰善繩

同十四年五月丁亥云々 類聚國史廿八

備中守 從五位上源朝臣安 嵯峨天皇之皇子也

嘉祥三年 月為任 大系圖 日本史

文德天皇

備中守 從四位上源朝臣多 仁明帝皇子

仁壽三年 月任之翌年齊衡元年為參議權守越前權守 同上

備中守 從五位下源朝臣元 嵯峨帝曾孫源明ノ孫也

任官年月不知 同上

清和天皇



備中守 參議從三位行右衛門督源朝臣融 即河原左大臣

貞觀元年正月十三日爲任 三代實錄

備中守 從五位下朝野朝臣貞吉

同二年正月十六日爲任 或曰貞吉是迄爲備中介云々

備中介 從五位下內藏朝臣高守

同年正月十六日爲任同四年遭母憂去職八月十七日再爲備中守

備中權守 左近衛權少將正五位下兼行云々源朝臣舒

同七年六月廿六日條載之同八年正月十三日轉近江權介 類聚國史

備中介 藤原朝臣保則

貞觀ノ初爲任 本朝文粹 同二年五月爲出羽權守同年八月移判官 類聚國史 同

八年正月十三日從四位下行式部少丞藤原保則爲備中權介 日本史 貞觀八年從

五位下備中權介十三年以勞從五位上備中守十六年備前權守

備中守 從四位下行右兵衛督源朝臣勳

同年月任之

備中守 從五位下大江朝臣本主

轉任年月不詳 阿保親王男大江音人父也 大系圖

備中權守 從五位下藤原朝臣晴見

轉任年月不知兵部卿歷六代大學助澁木子也

陽成天皇

備中守 源朝臣直

元慶元年十一月廿一日右近衛中將兼行備中守源直爲正四位下 國史卷百一

備中權守 源朝臣能有

同年月參議正四位下行左近衛中將兼備中權守源能有爲從三位 國史卷百一

備中權介 源朝臣元

同年十一月爲從五位上

備中權 藤原朝臣緣仁

備中權椽 藤原朝臣高松

同年月並爲從五位下 國史卷百一

備中守 參議從三位行治部卿在原朝臣行平

同參年十月廿四日條載之 國史



備中椽 良峯高親

任スル年不知 大系圖

備中守 從四位上行右近衛少將藤原朝臣清經

元慶五年七月六日任之權中納言從二位長良六男也同六年七月十四日兼讚岐

介寬平九年再兼備中守 國史 公卿補任

備中大丞 大江朝臣千里

元慶七年十一月任之延喜元年轉中務丞

備中守 參議正四位下行皇太后宮太夫兼備中守藤原國經

同八年十一月廿五日條載之 國史卷三十六

備中權介 源朝臣進

同年十一月廿五日爲從五位上

光孝天皇

備中權介 弓削宿禰秋佐

仁和元年載之 符宣抄

備中守 從五位上藤原朝臣清瀨

宇多天皇

任スル年不詳 橫佩右大臣豐成公六代陰陽助繼孫也 大系圖

備中介 三善清行

寬平五年正月十一日爲介 本朝文粹 善家秘記 昌泰三年二月兼刑部大輔云々

淡路守三善氏吉男也 補任

備中守 右近衛權中將藤原清經

同九年正月十一日再任之 補任

醍醐天皇

備中守 參議從三位藤原朝臣有實

昌平元年 月任之 補任

備中權介 從四位上藤原朝臣菅根

同三年正月兼任同廿九日補藏人頭 補任

備中守 左兵衛督在原朝臣友于

延喜元年二月十九日兼任 中納言行平男 補任

備中權守 從四位下行文章博士兼備中權守三善朝臣清行



同五年八月詔書載之 延喜式

備中權介 從五位上博士惟宗朝臣具範

同六年條日本記竟宴和歌集載之

備中介 藤原朝臣公利

同十一年任滿歸京云々 本朝文粹

備中椽 藤原家業

任スル年不詳 藤原真夏曾孫也 大系圖

備中守 從五位下源朝臣兼遠

任年同上 右大臣源能有公三代當元孫也

備中權介 從四位下右近衛少將藤原朝臣實賴

延喜二十年九月廿一日兼任翌廿一年為備前介右大臣忠平公男也 補任

備中介 平朝臣隨時

延長二年正月廿九日任之 一品式部本康親王孫右馬頭雅望三男也 補任

備中守 從五位下藤原朝臣仲遠

任年不詳 藤原藏下歷六代常陸介公葛男 大系圖

備中介 從五位上葛井宿禰清明

延長八年條載之越中守從五位下葛井清明元為備中介 符宣抄

朱雀天皇

備中守 從 位右近衛權少將左衛門佐小野朝臣好古

天慶四年七月十六日任參議為備中守但去年依藤原純友征伐之勳功也 小野

葛絃男 大系圖

備中守 參議左大辨從四位上藤原朝臣在衡

天慶五年十二月十三日兼任同七年二月轉丹波權守 初任 日本紀 竟宴和歌集

備中權守 從四位下藤原朝臣俊房

同六年 日本紀 竟宴和歌集載之

備中介 從五位上和氣朝臣兼濟 魚唇忠抄

同八年類聚符宣抄云備中介從五位上和氣朝臣兼濟 右大臣宣奉勅件人本任

解由進官既畢而未下所司 宜且請印任符者

天慶八年五月十六日權少外記賀茂安國奉

備中權介 藤原朝臣朝成



村上天皇

同九年七月十七日兼任天曆三年正月為備後權守右大臣定方六男也 補任

備中守 藤原博古

任官年月不詳 中納言山蔭四代左大臣有衡男也 大系圖

備中權守 小野朝臣好古

天曆九年閏九月十七日兼任天德二年七月兼彈正大弼 補任

備中守 從四位上藤原朝臣棟利

任官年月不詳 藤原武智曆孫真作五代伊賀守保方三男也 大系圖

備中介 源朝臣惟正

天曆十年九月八日任之天德五年為信濃守中納言當時孫左大辨相職男 補任

備中守 從四位下藤原清通

任官年月不知 中納言山蔭孫參議正三位安親男也 大系圖

備中守 從四位上右衛門佐使別當藤原朝臣朝忠

天德三年正月兼任同四年正月為伊豫權守 三十六家仙傳

備中權守 藤原朝臣朝成

天德三年正月兼任同年七月為勘解由長官 補任

備中守 小野朝臣好古

同四年正月廿四日兼任同年四月為太宰大貳

備中權守 源朝臣延光

同五年正月廿五日兼任應和三年為伊豫權守中務卿代明親王男也 補任

備中守 源朝臣重信

應和元年正月廿五日兼任

備中守 藤原伊尹

同二年正月廿二日兼任 補任

備中守 正四位下藤原朝臣為雅

任官年月不詳 前備中守清經孫權中納言文範男也 大系圖

備中權守 源朝臣重光

康保元年正月廿七日兼任同年三月參議中務卿代明親王男也 補任

備中權守 藤原朝臣元輔

同年三月廿七日兼任右大臣顯忠男也



備中權介 源朝臣懷忠

同二年正月廿五日任之 民部卿方元男也 補任 三年九月轉伊豫權介

冷泉天皇

備中守 藤原朝臣助信

任備中守而下向之時冷泉帝御製歌載在于新續古今和歌集別之部

圓融天皇

備中守 藤原爲光

備中權介 藤原朝光太政大臣兼道男

天祿二年正月廿九日並任之 補任

備中守 藤原朝臣宣孝

任官年月不詳 勸修寺贈太政大臣高藤公五代權中納言爲輔男也 大系圖

備中守 正四位下藤原知光

任官年月不知 前備中守爲雅弟

備中權守 藤原朝臣道隆

貞元二年正月任之 從一位兼家公男也 補任

備中守 源朝臣懷忠再任

同二年正月二十八日再兼之

備中守 正五位下橘朝臣道時

任官年月不知 載于續詞花集左大臣諸兄七代下總守仲任男也 大系圖

備中權守 藤原朝臣道隆

天元二年正月廿九日再任 補任

備中守 藤原朝臣中清

任官年月不知 前備中守爲雅男也 大系圖

備中權守 藤原朝臣伊涉

永觀元年正月兼任同年十月移近江權守 補任

花山天皇

備中權守 藤原朝臣忠清

寬和元年正月廿八日爲任同年十二月兼皇太后權太夫

一條天皇

備中權 平朝臣致賴



任官年月不詳鎮守府將軍國香弟良兼孫也武家四天王之一寬弘八年十二月卒

大系圖

備中守 藤原朝臣兼雅

永延二年 月爲任 補任

備中權介 藤原朝臣伊周

永祚元年二月廿七日兼任 攝政道隆男

備中權守 藤原朝臣安親

正曆二年 月爲任

備中權守 藤原朝臣誠信

同年 月爲任 補任

備中守 藤原朝臣陳政 冷泉院別官代

任官年月不知 前備中守清通弟 大系圖

本朝文粹 請持蒙天恩因准先例兼任備中介闕狀 大江匡衡右匡衡伏見當時之政化莫不延喜之舊風文道漸興賞罰分明天下幸甚祀堯者多愛匡衡樂書籍而貧携風月而老其所經歷之孝廉茂才廷尉憲臺皆是可應州牧之舉之地也而不知舊貫愚

淺之人或以爲獻策者縱雖歷式部民部丞職人檢非違使是儒者也不可任受領因之今雖被興文道曾無尙僧尊師淫書耽學之徒綴鉤成業之名多爲出身之計然間三史文選師說漸絕詞華翰藻人以不重道之陵遲莫不由茲夫儒者任受領者往聖重道之時例也儒者不任受領者近代輕文之時例也若謂老而嗜詩之儒不可乘熊軾則白樂天寧非蘇州刺史哉若謂貧而好書之士不可引阜旗亦朱買臣豈非會稽太守哉匡衡家途窘急老母衰危也每見後輩庸才之榮耀未曾不慨然廢書而歎非戴聖日之照臨何乾沉身之愁淚望請天恩兼任件闕闕將仰帝德之光古知文學之爲先匡衡誠惶誠恐謹言

長德二年四月二日正五位下行式部權少輔兼文章博士大江朝臣匡衡誠恐誠惶謹

言

備中守 正四位下藤原朝臣隆光

任官年月不知 前備中守宣孝男也 大系圖

備中權守 藤原朝臣正光

長德二年三月爲任 太政大臣忠義公六男 補任

備中守 藤原朝臣經房



同三年正月廿八日兼任同四年十月左近衛權中將正二位高明四男 補任 本朝世紀

備中權守 藤原朝臣實成

長保三年八月廿五日兼任 閑院太政大臣公季男

備中守 藤原朝臣忠輔

同四年二月三十日兼任 補任

備中權守 參議從三位菅原朝臣輔正

同五年正月兼任 中古歌仙三十六人傳 補任

備中權守 平朝臣親信

寬弘二年正月廿七日為任 伊豫守直材男 補任

備中權守 藤原道方

同四年四月兼任 右大臣重信男

備中守 藤原兼隆

同六年正月廿八日兼任

備中權守 藤原朝經

同八年二月兼任 大納言朝光男 補任

三條天皇

備中權守 藤原賴宗

長和二年正月兼任 左大臣道長二男 補任

備中權守 源賴定

同五年十月十日兼任

後一條天皇

備中權守 藤原公信

寬仁四年正月三十日兼任 補任

備中權守 藤原朝任

萬壽元年正月廿六日兼任

備中介 從四位上行權大輔兼大學頭大江朝臣通直同二年六月條載之以大中臣

惟理補任伊勢權大宮司之時奉行之一人也 類聚符宣抄

備中權守 藤原兼賴

長元五年二月八日兼任

備中守 源資綱



同七年正月兼任 權中納言顯基男

備中權守 參議藤原經任

同九年二月為任 魚魯抄 按補任作長曆二年備中權守

備中守 藤原邦恒

任官年月不知左大臣良世四代從五位上邦昌男治曆三年八月卒 大系圖

後朱雀天皇

備中權守 藤原資仲

長曆元年正月廿三日兼任 大納言資平男 補任

備中權守 藤原行經

長久二年正月兼任 大納言行成卿男

備中守 隆光

任官年月不知 大系圖

備中守 正四位下藤原兼房 延久元年卒

任官同上 粟田關白道兼男權中納言兼隆男 大系圖

備中守 正四位上源政長 中古記云寬治八年八月十九日於賀陽院有歌合與備

中守政長朝臣云々

任官年月不知宇多源氏敦實親王五代贈從三位濟政孫也 大系圖

補任按白河天皇承保承曆中任備中守其初為刑部卿

後冷泉天皇

備中權守 源基平

永承元年二月十一日兼任 敦明親王男 補任

備中守 正四位下高階朝臣為定

任官年月不知 高階為賢父

備中權介 藤原良基

永承七年二月兼任 中納言良賴男

備中權守 藤原經季

天喜元年正月廿七日兼任

備中守 正四位下藤原信宗

任官不知 小一條院後也承保元年卒 大系圖

備中權介 從五位上藤原季綱



任官同上 兼管抄

備中權守 從三位平執時

任官同上 同上

備中權守 藤原經季

康平元年正月三十日兼任 補任

備中介 從四位上藤原長房

同三年二月兼任

備中權守 源基平

同五年正月三十日兼任

後三條天皇

備中介 大江匡房

延久四年四月廿六日兼任

白河天皇

備中權守 正三位兵部卿藤原長房

承曆二年 月兼任之

備中權介 源雅俊

同三年正月兼任 右大臣顯房男 補任

備中權介 左衛門權佐令宗允亮

永保元年正月兼任之

備中守 藤原仲實 大納言實季三男

同年二月爲任 寛治五年正月補藏人頭止備中守

千載集云 藤原仲實朝臣備中守にまかれりける時くして下りたりけるを思

ひうすくなりて後月を見てよみはへりける遊女うた

數ならぬ身にも心の有かほに獨も月をなかめつる哉  
女郎名欠

備中權介 源雅俊

永保三年二月再任之 補任

備中守 正四位下行式部大輔 實綱

應徳中前後兼任之

備中守 正四位下高階朝臣爲家



任官年月不知 紫式部日記云棟時の娘云々  
備中守 棟時

堀河天皇 任官同上 葛原親王廿四代西洞院右衛門督時顯男 大系圖

備中權守 藤原能實

寛治元年十一月十日兼任 太政大臣師實公男 補任

備中權介 藤原師頼 補任

同年月 兼任之

備中介 源能俊

同 兼任之 大納言俊明男 補任

備中權介 源顯雅

同五年正月兼任 右大臣顯房卿男 補任

備中介 藤原季仲

同六年正月兼任 權中納言經季男 補任

備中權守 藤原雅俊

同七年 月爲任

備中介 藤原師頼

嘉保二年正月兼任

備中權守 藤原仲實

承德二年正月兼任

備中介 藤原俊忠

康和五年二月三十日兼任 入道大納言忠家卿男

備中權介 藤原師時

同年月 兼任

備中守 從五位上侍從藤原伊通

嘉承元年十二月五日爲任 坊門大納言宗通卿男 大系圖 補任 永久三年正月辭

備中守

鳥羽天皇

備中權介 源顯雅

天仁元年正月十三日兼任



備中介 藤原為隆

天永二年正月廿三日為任 參議大藏卿為房男

備中權守 藤原為房

永久元年正月廿八日兼之

備中守 藤原重通

同二年正月廿二日為任 (是年迄兄伊通備中守也當年重通代之) 民部卿宗通

卿男 補任 永曆二年薨 大系圖

備中介 源雅定

永久四年八月卅日兼之 右大臣雅實公二男

備中權介 藤原忠宗

元永元年正月為任 右大臣家忠公二男

備中介 藤原成通

保安二年正月廿四日為任 中宮大夫宗通四男 補任

備中介 藤原經定

同四年十一月六日為任 大納言經實卿男

備中權介 藤原教長

同年月日為任 大納言忠教卿男 補任

崇徳天皇

備中守 敦兼朝臣

天治元年十月鳥羽上皇高野山御幸供奉人也 補任

備中守 藤原忠隆

大治元年十二月四日為任 修理太夫基隆男 補任

備中介 藤原宗能

大治三年正月廿四日為任 補任

備中權守 藤原成通

長承元年正月廿三日為任 中宮大夫宗通男 補任

備中權介 藤原公教

同日兼任 權大納言實行男 補任

備中權介 藤原經定 再任也

同三年二月廿二日為任 補任



備中權守 大藏卿藤原經忠

保延三年 月為任 補任

備中守 藤原光賴

保延二年十二月廿日為任 權中納言顯賴男 補任

備中權守 藤原忠基

同三年正月卅日為任 補任

備中權介 藤原顯業

同五年正月廿五日兼任 右少辨俊信男也 補任

備中守 藤原定隆

永治元年十二月二日為任 補任 閑院左大臣冬嗣之後猶間中納言清隆子也後

從三位二叙 大系圖

近衛天皇

備中介 藤原資信

康治元年七月廿三日任之 參議顯實男 任補

備中介 藤原俊通

久安元年正月廿二日為任 同上

備中權介 藤原顯輔

同二年正月十三日為任 同上

備中權介 藤原實長

同日 為任 同上

備中守 藤原光隆

同五年六月廿九日為任 中納言清隆男 同上

備中權守 藤原經宗

同六年正月廿九日任之 補任

備中權介 藤原公保

同日任之 左大臣實能公男 補任

備中權守 藤原朝隆

久壽元年正月廿一日為任

備中守 藤原公通

同二年 月任之 補任



後白河天皇

二條天皇

備中守 藤原親房

應保二年四月七日任之 右京大夫信輔男 補任

備中守 藤原濟綱

任官年月不知 正四位下宮内卿師綱男 同上

六條天皇

備中守 藤原定隆

仁安元年六月廿二日再任之今年十月廿一日止

備中守 藤原資賴

同年十月廿一日為任 參議賴定男

備中權守 源雅賴

仁安二年正月卅日為任

備中權守 藤原兼光

同三年正月十一日兼之 民部卿資長男

高倉天皇

備中權守 從三位藤原重家

嘉應二年正月十八日為任 右京大夫顯輔男

備中守 源雅賢

承安元年四月廿一日為任 右近衛少將通家男

備中權守 左近衛中將藤原兼房

同二年正月三日任之

備中守 源雅賢

安元元年正月廿二日再任之

備中權介 藤原公時

同年正月廿二日兼任 權大納言實國卿男

備中權介 源兼忠

同日任之 權中納言雅賴卿男

備中權守 藤原實守

治承元年 月任之 補任



備中守 藤原顯經

任官年月不知 河邊左大臣魚名公後中宮大夫賴保男 大系圖

安徳天皇

備中權守 藤原公時

養和元年三月廿六日兼之

備中守 從五位下平師盛

任官年月不知 小松内大臣重盛公男 大系圖

東鑑云壽永三年二月備中守師盛ヲ遣江守義定獲之云々

備中權守 平經盛

壽永元年三月八日爲任

備中守 源行家

任官年月不知 鎮西八郎爲朝弟 大系圖

後鳥羽天皇

東鑑云壽永三年三月十八日播磨美作備前備中備後已上五ヶ國ハ梶原景時土

肥實平等遣專使可令守護之由云々 又同年三月廿五日土肥實平爲御使於

備中國行體務仍在廳散位藤原資親已下數輩還補本職是爲平家失度者也

守護ト云職此時始ヲ見ユサレハ此時ヲ此職ノ權興トスルカ

備中權介 藤原家經

文治二年二月卅日兼任 左大臣兼雅公男 補任

備中權守 藤原宗賴

同三年正月廿三日兼之

備中權守 大藏卿藤原

同四年十一月宣旨連名之内載之 東鑑

備中介 藤原公國

同五年正月十八日兼之 權大納言實家卿男 補任

備中權介 藤原高通

同日兼之 左京大夫清通男 補任

備中權介 藤原兼家

建久元年正月廿四日兼任 前内大臣忠親公男 補任

備中權守 藤原公繼



同二年二月朔日兼之 補任

備中介 藤原家經

同三年正月廿七日兼之 同上

備中介 藤原高通

同五年正月卅日兼任之 同上

備中權介 藤原教成

同八年正月卅日兼任之 相摸守平業房子 同上

備中權守 源兼忠

同年十一月九日兼任之

備中權介 藤原公國

同八年正月卅日兼之

土御門天皇

備中權介 源雅清

正治二年正月廿二日任之 大納言通資卿二男 補任

備中權守 源通具

建仁三年正月廿一日兼任之

備中介 藤原伊時

同三年正月十三日任之 右兵衛督伊輔二男

備中權介 藤原宗嗣

同月廿五日兼任 民部卿伊賴卿男

備中權介 藤原公雅

建永元年正月十三日任之 從三位實明卿男

備中介 藤原兼季

承元元年正月十三日爲任 內大臣忠親公男

備中權守 修理大夫藤原仲經

同年月 任之

順德天皇

備中權介 源師季

建曆元年正月十四日兼任 左近衛少將忠定男

備中權介 藤原家長



建保元年正月十三日兼之 補任

備中權守 藤原公長

同六年正月任之 同上

備中守 藤原成實

承久元年八月四日 任之 大宰大貳親實卿男 同上

備中權守 藤原信能

同三年正月十三日任之 同上

後堀河天皇

備中權守 源雅清

貞應元年正月廿四日任之 補任

備中介 大嘗會國司藤原言家

貞應元年十一月十五日任之 兵部卿成家卿二男 補任

備中介 藤原實文

嘉祿二年八月廿六日任之 權大納言公宜卿男 同上

備中守 平信繁

任官年月不知 大系圖

備中權介 藤原資季

寬喜三年正月十四日爲任 入道從三位資家一男 補任

備中介 菅原淳高

同年正月廿九日兼任 從二位在高男 同上

備中守 藤原親季

同三年十月十二日兼任之 入道正二位定季卿男 同上

備中守 藤原隆綱

貞永元年八月廿一日爲任 按察使隆衡一男 同上

四條天皇

備中權守 平有親

天福元年正月廿四日爲任 同上

備中權守 藤原實持

嘉禎三年正月廿四日爲任 同上

備中權守 平有親



曆仁元年正月廿三日為再任 同上

備中守 平惟忠

同年十二月卅日為任 從三位親國卿男 同上

備中權守 藤原實蔭

仁治元年正月廿日任之 同上

備中權守 藤原家時

同二年三月朔日任之 同上

備中權守 藤原定嗣

同三年十一月四日任之同年十二月以國司賞叙從三位按察使光親卿二男 同上

後嵯峨天皇

備中守

任官年月不知 內大臣高藤之後權中納言顯俊男 大系圖

備中守

為任年月不知 左大臣魚名公之後大澤長門守重宗二男 同上

備中守

寬元三年八月五日任之 權大納言顯朝卿男 補任

後深草天皇

備中權守 藤原實任

寶治二年 月任之 同上

備中權守 藤原師繼

建長二年正月十三日任之 同上

備中守 從三位左中辨平時高 從三位左中辨之後ノ叙任也

為任年月不知 葛原親王後權中納言範輔弟 大系圖

備中守 正五位下菅原清兼

為任年月不知 修理太夫淳兼弟 同上

龜山天皇

備中權守 大嘗會國司藤原顯雅

正元二年十月十五日任之 補任

備中守 源經資

文應元年十一月七日兼之 從二位公直卿男 同上



備中權介 大嘗會國司從三位藤原顯名

同日任之 從二位顯氏卿男 同上

備中權介 藤原範藤

弘長四年正月十七日兼任之 左馬頭範繼男 同上

備中權守 源通世

同年月任之 同上

備中介 藤原宗氏

文永二年正月廿日兼之 參議忠繼 同上

備中權守 源具房

同六年三月廿七日任之

備中權介 源俊通

同十年三月廿五日兼任之 權大納言具房男 同上

備中權守 源具氏

同十一年三月廿五日兼任之 同上

後宇多天皇

備中權守 藤原家教

建治二年四月十四日任之 同上

備中守 從五位下平朝房

為任年月不知 北條時政、後正四位下武藏守朝直男

備中權守 藤原賴親

弘安三年三月十二日任之 同上

伏見天皇

備中權守 源通重

正應元年二月十日兼之 同上

備中守 藤原教定

同年十一月十日兼之 右中將教賴男 同上

備中權守 藤原公尹

同二年 月任之 同上

備中守 源通藤

同四年十二月廿二日任之 權中納言通教卿男 同上



備中權守 源通嗣

永仁二年三月廿七日兼之 同上

備中權介 藤原冬房

同日兼之 左近衛中將良嗣男 同上

備中守 藤原為俊正五位下

為任年月不知 內大臣高藤之後木工頭為說男 六系圖

備中權守 從五位下紀文篤

為任年月不知 紀長谷雄之後從四位下文榮孫 同上

備中權守 藤原實時

永仁六年三月廿二日兼任之

後伏見天皇

備中權守 藤原實躬

永仁七年三月廿四日任之 補任

備中守 平親時

正安二年三月六日兼之 權大納言經親卿男

備中介 源通顯

同三年二月十四日任之 權大納言通重卿男 同上

備中守 大嘗會國司從四位上藤原俊言 補任 作信言 左馬頭為言男 補任

備中介 大嘗會國司 四位上藤原公豐 補任 作公量 權中納言實香卿男

備中權守 從二位藤原公茂

備中權介 從四位下源資親

備中權少掾 從五位下安倍光弘

從五位下安倍資範

從五位下清原重基

從五位下安倍俊弘

從五位下中原榮明

從五位下紀枝成

從五位下菅原宗長

從五位下紀文家

從五位下清科重資



從五位下安倍國弘

備中守俊言以下十五人正安三年十一月四日大嘗會之時叙之 正安大嘗會記

後二條天皇

備中權守 藤原公茂

正安四年 月兼任之 補任

備中權守 藤原經繼

嘉元元年正月廿八日任之 同上

備中守 藤原顯資

德治元年三月卅日兼任 同上

花園天皇

備中權守 藤原公敏

正和元年正月十三日兼任之 同上

備中守 平親時

同五年正月十三日兼之 權大納言經親卿男 同上

備中權守 藤原公修

文保元年三月廿七日兼之 同上

備中權守 藤原氏忠

同二年正月廿二日兼之 同上

備中權介 大嘗會國司藤原廣通

同年十一月九日任之 參議有通卿男 同上

後醍醐天皇

備中權守 源時通

正中二年五月任之 同上

備中權守 源有賴

嘉曆二年三月廿四日兼任 同上

備中權守 藤原實顯

元弘元年正月十三日兼任之 同上

光嚴天皇

後醍醐天皇

備中權守 清原賴元



爲任年月不知 穀倉院別當賴業五代正四位下良枝男貞治六年七十八歲而卒

大系圖

備中權守 源有光

延元元年 月爲任 補任

北朝光明帝

後村上天皇

備中權守 藤原長光 北朝

曆應二年正月十三日兼任之 同上

備中權守 藤原忠季

北朝康永三年正月廿四日兼任之 同上

北朝崇光帝

備中權守 藤原家賢

北朝貞和五年二月十五日兼任 同上

北朝後光嚴帝

備中權守 藤原實音

北朝文和四年三月廿八日兼任 同上

備中權守 平親顯

北朝貞治元年 月任之 補任

備中權守 藤原行忠 參議從三位

北朝應安元年二月任之 補任貞治六年二月

長慶天皇

北朝後圓融帝

後龜山天皇

備中權守 藤原公勝

北朝永和元年 月兼任之

後小松天皇

備中權守 藤原公仲

北朝永德三年三月廿八日兼任 補任

備中權守 藤原公俊

北朝嘉慶元年正月廿八日任之 同上



備中權守 藤原資俊

北朝明德二年三月廿六日兼任 同上

備中權守 藤原永行

同六年三月廿七日兼任 同上

備中權守 藤原實季

同十九年正月廿八日兼任 同上

稱光天皇

備中守 藤原行光

為任年月不詳柳原權大納言資明曾孫也後至權大納言嘉吉三年卒年五十一

大系圖

備中權守 藤原公名

應永廿八年三月廿四日兼任 補任

後花園天皇

備中權守 藤原尹賢

永享二年三月卅日兼任之 同上

備中權守 源持康右近衛中將正四位下

嘉吉元年三月十六日兼任之 同上

備中介 藤原定嗣左近衛中將

文安二年三月廿三日兼任之 內大臣持忠公男 同上

備中權守 參議正三位上藤原永豐

寶德二年三月廿九日兼任之 同上

備中權守 參議正四位上藤原公澄

享德三年三月廿三日兼任之 同上

備中權守 參議從三位源教親

長祿二年三月廿四日兼任之 同上

備中權介 從五位下侍從藤原實隆

同三年三月廿八日任之 內大臣公保公男 同上

後土御門天皇

後柏原天皇

備中權守 參議正三位藤原永家



天文八年三月廿三日兼任之 同上

備中權守 正四位上右大辨藤原宣治

同十二年三月廿五日兼之 大納言宣秀卿男 同上

備中權介 正五位上右中辨藤原頼房

同十八年三月廿五日任之 參議右大辨頼繼卿男 同上

本州國府在應或ハ遷授兼任の人々守介の姓名等詳に是を次第せんとすれ  
と漸六國史公卿補任其餘わつかの書に散在せるを拾ひ集めて記したれば  
漏たるハさらなり重任異同の違ひまた多かるべし

鎌倉の右大將家守護地頭を居へられて後國司ハ次第に衰へ守介の名も自ら空  
敷なりてたま々々其國に守たるも陪臣被官の借號と變りぬされば伊勢氏二階  
堂氏など其はしめ一たひ此國に任せられしより遂に空名なから代々の通稱と  
なりたるも有また三村家親庄爲資穂井田元清などのことく其國に在て私に稱  
せしも有へし故今鎌倉以後武家の此國を名とせるを舉て國司との差ひを示す  
安徳天皇ノ時  
從五位下備中守平師盛

小松内大臣重盛公男壽永三年二月爲遠江守義定被獲云々 東鑑 大系圖

備中權守平經盛

備中守源行家

東鑑云壽永三年二月十八日播磨美作備前備中已上五ヶ國ハ梶原景時土肥實  
平等遣專使可令守護之由云々

又同年三月廿五日土肥實平爲御使於備中國行 應務仍在應散位藤原資親已下  
數輩還補本職是爲平家失度者也

又曰正嘉二年正月院飯云々著坐于庭上東西人數之内備中判官代定忠 備中  
右近太夫將監景氏云々

又同月將軍家御參鶴岡宮行列前驅八人之内定忠景氏云々

又八月鶴岡放生會將軍家御出如例供奉人之内備中次郎兵衛尉行藤云々

備中次郎兵衛尉行藤 行有男

二階堂備中守行有 二階堂爲憲十代出羽守行義之子 大系圖

文永二年引付衆ニ加ラル關東評定傳文永七年ニ前備中守トアリ又東鑑正月

院飯御行騰ノ役トナル



備中次郎左衛門尉行勝 東鑑

佐々木六角備中守頼綱

佐々木秀義ノ後左衛門尉泰綱ノ子也 大系圖

佐々木備中守時重

佐々木秀義六代對馬守時綱ノ五男 同上

二階堂備中三郎行俊

前備中守行有ノ父行義ノ弟常陸介行久ノ孫也 同上

二階堂備中守時藤

前備中次郎兵衛尉行藤ノ男 大系圖 武家評定傳

佐々木大原備中守時親

備中守時重ノ男 大系圖

二階堂備中守行敦 元弘四年逝世 武家評林

前備中守時藤男 大系圖

北條備中守平朝房

北條時政ノ後武藏守朝直男 同上

佐々木大原備中守義信

前備中守時親ノ男 同上

二階堂備中守藤原景綱 四郎左衛門尉

武智麻呂ノ後爲憲十四代下總守頼綱ノ男也 同上

佐々木白井備中守入道親胤

前備中守義信弟二郎右衛門尉親信男 同上

二階堂備中前司貞藤

元德二年秋山行幸記ニ出

佐々木備中守秀親 前備中守親胤男 大系圖

佐々木備中守持綱

佐々木信綱五代備前守持信男 同上

從五位下佐々木備中守高秋

佐渡判官道譽ノ弟六郎左衛門貞滿男也 同上

木梨備中守平光胤 從五位下 同上

桓武帝後胤杉原流祖伯耆守光平五代木梨民部丞爲平男



從五位上佐々木備中守滿高

前備中守賴綱孫尾張守氏賴男 同上

伊勢備中守平盛定

桓武帝ノ胤伊勢流祖越前守正度十一代肥前守經久ノ子盛久ノ男 同上

伊勢備中守平貞國

伊勢守貞繼子七郎右衛門貞信其子伊勢守貞行子也 同上

伊勢備中守貞親 從五位下

貞國ノ男文明五年正月卒年五十七 同上

伊勢備中守貞藤

前備中守貞親ノ弟

伊勢備中守貞宗 從五位下

貞親ノ男 同上

備中守護細川上總介氏久 歷仁配

伊勢備中守貞辰

貞藤ノ子兵庫介貞職ノ男也 六系圖

伊勢備中守貞忠

貞宗ノ男 伊勢守貞陸ノ子也 同上

庄備中守爲資

三村備中守家親

總井田備中守大江元清

毛利元就ノ子備中猿掛城主



備中志加陽郡卷之十四

井尻野村 刑部郷

高七百十一石 吉備國史同斷

修驗 中往來寺 大覺院

同 下往來寺 成就院

洪

松山成羽川の下流此所にて水を堰とめ賀陽郡都宇郡窪屋郡十二ヶ郷の諸領ニ用水を取此堰ハ昔妹尾太郎兼康より始りて今ニ例と成上し

延喜式主税上 備中國堰溝料稻一万七千束と有之ハ此堰の事にて有之由ニ語傳ム

井山城

府志云 城主矢尾入道といふ是ハ楠か黨八尾別當顯幸が末葉なりと云平川氏いづれの紀傳に據しにや信トがたし

井大明神

集成志ニ 吉田表ハ一説に是を鼓神社なりと云いふかし本社鳥居所祭速秋津彦命五穀成就の守護神にて水門を守る神とかや



本地樂師佛神主前田神九郎 吉備國史云 大藏神ノ妻伊怒姫と云ハ覺束なし井とい此邊の地名也井山井尻井尻野野井戸など皆此井に抱はれり壯人井尾氏と云古ハ清流山往來寺也

天神宮 井尻野 神主井野若狹守

當社に鍛冶の天神とて相殿に勧請し奉ると也當社ハ菅丞相靈夢に依て祀る處也鍛冶天神ハ青江鍛冶住居せし頃より勧請すといふ則此邊に鑄物師と云所も有神主菅原氏代々勤之

井山城 城主八尾入道と云八尾別當顯幸が末也といふ

井山寶福禪寺 滿足庵 文珠菩薩 空海ノ作 備中五ヶ文珠の一なり

備中護國井山寶福寺開山日輪阿闍梨と云年歷俗姓不詳木像今に有鈍菴所創也七堂伽藍にて大殿ハ虚空藏菩薩(本新山能滿寺の所持を移せるなり)俗に藥師寺次郎左衛門が力乞の虚空藏と云三級塔ハ本尊大日如來脇持ハ四天王也塔頭五十五宇山外の末派三百餘寺也

四條天皇客星崇を成して不豫なりしか法を諸寺に求め賜ふと雖も無驗特に鈍菴に勸して加持せしむ山に在て詔を承け新に壇を築て懇に祈念する事七日滿

庭の曉に至て客星雷の如く鳴て壇前の池中に墜つ此壇を禮星壇と名付池を千沢井と云舊跡今猶存して井山十境の中也依之帝病の愈しかハ主上大に悦び賜ひ備中國上津江庄澁江庄生石郷八田部郷子位ノ庄刑部郷妹尾郷眞壁郷服部郷三和郷に於て十四ヶ村莊田三千貫を賜ひ永々寺産となし舉て官寺と成され都郷一ツに崇奉を加ふ最明寺殿時頼巡國せし時山に來りて三重塔を建て麥草村百石地を以て塔修補料とし時頼の位牌佛殿に有西明寺殿道崇大居士と有 大野忠意禪門も又遠州内田ノ庄を寄附せしむ爾來毛利家中國を領せしに及て護法檀越となり三千石寄附せられ佛宇輪煥僧規嚴密晨香夕燈燦る事なし天正年中備中兵亂し幸山城主石川左衛門久式が幸山落城の夜兵火一山を燒却す唯佛殿三級塔方丈香積院開山塔滿足菴船若庵等殘るのニ秀吉公中國の追討の節三千石の領地沒收せられ是より寺莊納りし事なく其後台徳院殿御時慶長六年御代官小堀遠江守政一の計らひを以て下道郡上原地に於て百石貳斗四升餘の寺莊を賜ひ舊例に依て國土鎮護の官寺と被成相續す今に至て繁榮せり此時空山禪師の時也境内古ハ東西十町餘南北二十町餘と云今ハ東西二百間餘南北七十間也



或曰往古ハ天台宗なり上古の事不詳されと新山寺の古蹟ニ嶽寺あり下りて滿  
足坊と成よしいへり彼嶽寺ハ新山一山の舊地用明天皇二年吉備津を鬼ノ城山  
頭ニ祭る其別當新山菩提寺の衆徒の其一坊也とて四條院天福年中にハもはや  
嶽寺を下りて井尻野に移りしにて満足庵則五十五坊の其内なり開山日輪より  
中興鈍庵和尚迄歴代不知亂世に依て或ハ無住或ハ華嚴天台混雜して代々住之  
繼鈍庵に至て中興する處なり

秀雄云門田善根寺位牌ニ天正三年六月廿六日石川源左衛門久式(此時備中守)家  
老窪田采女守安監物倫直同日於阿部山自害すと書付たり石川の勢井山阿部山  
の峰ニ精籠る毛利家焼討して攻けるに依て久式ハ岡谷へ落行窪田守安等殘止  
りて此地にて腹を切けるにや

- 井山十境
- 北高峰 南溟池 萬松徑 獨木橋 碧柳塘 白蓮池 聚國宮 禮星壇 三級塔
- 千尺井 なり

塔頭  
開山鈍庵ノ塔頭今の寶福寺也

- 満足庵 靈松庵 般若庵 榮松庵 天真庵 長壽庵 松孤庵 上東軒 下東軒
- 神宮庵 月桂庵 桂久庵 真空庵 天助庵 瑞雪軒 一隱庵 西照庵 祥光庵
- 成就軒 平等庵 壽徳院 龍慶院 寶聚庵 慈眼庵 養性庵 臨池院 殘照軒
- 寶林庵 孤雲庵 松風軒 松琴庵 澤雲寺 覺林庵 大休庵 自得庵 聚福寺
- 虎溪庵 圓成院 雲龍軒 妙應軒 谷響院 正知庵 臨川院 自覺院 見桃庵
- 焉水院 妙峰院 瑞祥院 休心院 知足院 妙樂院 即休院 此外比丘尼寺
- 三院

都計五十五字也

井山前住兵亂火災に依て世牌紛失して委しからず今左に世牌の現在するを記  
す初立嚴以後ハ正敷其傳を殘せり

開山 鈍庵慧聰

姓ハ藥師寺氏備中の人也初粹ニ台教兼達密乘ニ爲ニ座主貞永年中於賀陽郡建ニ伽藍  
號曰井山寶福禪寺四條天皇不豫に依て勅して加持せしむ師懇念する事一七日  
帝の病愈ゆ依之莊田若干を賜り永く官寺となる聖一國師歸朝演法の道風を聞  
て席下に走りて宗要を扣き忽諸佛の本源を見徹する事を得法喜の和歌を呈し



て曰 津由箇々留多仁能字毛禮伎時於惠天若葉奈良年土茂美地寸流加奈 國師領之更衣嗣法井山に歸り聖一國師の弟子玉溪慧瑠を請して寶福寺第二世禪法の開祖と爲す師ハ満足庵を創建し老を授し永仁五年酉九月六日寂す法を東福寺聖一國師に嗣なり

二世玉溪慧瑠姓氏不詳法を東福寺聖一國師に得て普門に住持す次に鈍庵の請に應じて寶福寺二世となり慧日の法燈を排くと云々聖一國師年譜ニ云玉溪慧瑠ハ瑜伽の教を備中井山に傳ふと云々又續扶桑禪林僧法傳ニ載たり

三世無夢一清姓氏不詳玉溪を師として遠く宋地に遊び三十歳を經て數十員の善智識ニ參り宋乘の要旨を究め歸朝して法を玉溪慧瑠ニ嗣ぎ寶福寺に住して井山僧規を定む大に宗風を振ふ故に阜開山と號す應安元年五月廿四日寂す四世曇瑞慧 五世 高庵芝丘 六世 復圭

十一秀嚴九頴或ハ十世ニ備中の人也法を玉溪ニ嗣ぎ寶福寺に住す入滅闇維の煙氣所及皆綴舍利平生所持數珠不壞云々應永十五年子十一月十六日寂す塔を號榮松

十九 眞收蓮 廿一 心傳抄 廿二 節嚴春

廿五 春溪喜 廿七 宗嚴綱 三十四 林岳茂

四十三 大化育 四十四 徹溪悟 四十九 惟仲寧

五十 統之宗 五十一 希遠賢 五十六 大宗洪

五十八 季芳稔 六十一 常父在 六十二 南英詢

此時節雪舟等揚 大機惠雄 中興空山堯雲山 明室清德 乾外清亭 中興立巖惠久 (是より後ハ歴世連綿と其傳詳なり) 鐵道惠石 象海慧洪 逸堂惠光西堂 大休惠昉

井山十境詩

朝散太夫肥後守豐臣公定

北高峰

鬱々蒼々仰邊胸 叢林閱世有喬松 不唯一部華嚴講 良卦象占指北峰

南溟池

南溟瀾渺化鯨鵬 流入小池徹底澄 方丈纒容萬千座 月明猶見鏡中燈

萬松徑

寺在江山寂冥濱 逶迤幽徑絕埃塵 自從有一栽松士 子葉孫枝幾萬春



獨木橋

世路稀通獨木橋，陰森竹樹谷風飄。却嫌駟馬高車客，神破衲衣懶折腰。

碧柳塘

清渠雨過水潺湲，夢到方塘芳草邊。楊柳入春開碧眼，莫言雙履逝西天。

白蓮池

寶池環繞梵王家，禪坐任他聒耳蛙。標識道機無所染，泥中擎出白蓮華。

聚園宮

數畝緝園西又東，烟霞泉石起仙風。聚星○○聚景處，併在山中五祀宮。

禮星壇

佛僧威焰徹天根，不屑容星犯帝關。千古靈壇留隕石，薜封蔓給鎖山門。

三級塔

名山淨刹顯靈蹤，古佛嚴然現玉容。涌塔巒諸三級浪，待見他日躍僧龍。

千尺井

稱子從來學佛心，拾薪汲水古鬱林。井山曾是有斯井，智綆必期千尺深。

享保六丑六月廿一日

葵峰主人

同十境題詠

備前 近藤 篤

北高峰

不獨雪山險巖躋，使客勞觀道坐清曉。計明星北高，

南溟池

蕩漾清池色，碧波乘夜澄。六月鳴飛日，無熱作炎蒸。

萬松徑

鬱々萬松間，躡屐何處去。到來失東西，惟聞樵夫語。

獨木橋

深谿架飛梁，十里間化城。似得神通力，飄々蹈空行。

碧柳塘

數株楊柳色，濃碧映清池。天風一以散，毵々亂長絲。

白蓮池

十里池中清朗々，白蓮開。怪得法筵側，群龍捧玉來。

聚園宮

空山千樹裏，禮祀此薦蘋。緝靈王氣聚，古祠知何神。



禮星壇

聰公禮星處千載雨花深至今清籟起猶爲仙梵音

三級塔

湧出在何年高接梵天上上有仙鶴鳴時和風鐸響

千尺井

層井深千尺湛々碧苔寒那知機槍墜更迎龍顏歡

同題詠九境

北高峯

備中倉敷岡壽卿

絕險不可攀高峯遙舉首何當九折杖踏雲朝北斗

南溟池

清衆入鬱林年々此結夏有池擬南溟何姓各鯉化

萬松徑

驚嶺一徑通想彼潁川水清籟起松林堪洗塵中耳

獨木橋

溪流架獨木歩々上方遙似入天台路兢々度石橋

白蓮池

池上花開日蓮房白露寒拈來試示聚誰是破顏看

聚園宮

不殺彌黎奠攝宮名聚園威靈赫千古長○銷山川

禮星壇

眞僧修大法威力感蒼天壇上妖星隕宸襟自泰然

開基僧曰鈍菴上人

四條帝不豫使上人禱禳爲星供妖星隕壇上

三級塔

山中開淨域湧出玉浮圖三級抽雲表鐸聲流六區

千尺井

當年隕星跡碧水至今清神井深千尺不負井山名

大機和尚朝鮮渡海之事

和尚者生國備中國下道郡久代村產則同村天福寺に住し賜ふ剃髮ハ井山塔中満  
足庵なり後京都本寺惠日山東福寺中天徳庵に住す此庵ハ井山第三世無夢禪師  
の開基也かくて太閤秀吉公朝鮮陣の事思召立有しかと彼地見分の上ならでハ



叶ふまゝと五山の僧大機和尚ハ博學多才なる故に召出され渡海の事を命ト賜ふを再三辭し申されけれ共許容なく終に朝鮮に渡り外國の僧と成國中の様  
子文術を以て聞合記録して本朝に歸り賜ひ扱ころ朝鮮征伐ハ有ける也其後和  
尚を秀頼公の師範と成し給ふ誠に學才道徳正敷僧也けれハ世俗の交りを遁れ  
度思ひ建仁寺中韓長老を弟子分として秀頼公の師範と成し和尚ハ井山へ歸り  
満足庵に住し給ふ此庵ハ別して普請美を盡せりと也

惣坪五千四百坪 佛殿間敷 不知 三重塔三册 四册 開山堂三册 四册 僧堂三册 四册 經藏二册 四册  
客殿六册 九册 庫裏五册 九册 小書院 廊下 玄關 中門 表門 地藏堂 鐘樓堂  
鎮守五社 明神社春日 稻荷 王子 山王 八幡 八尺四寸 別當寶福寺 拜殿十尺 二册 四尺 石鳥居  
三重塔 初時頼入道建立有リ天正年中新山の塔を求めて再建し寛文七年下秦  
村川島山興禪寺の塔をまたあがなひて建之と云  
蔭田玄蕃ハ秀吉公の小性にて一萬石を領せしが大機和尚執成にて七萬石迄立  
身す石田三成亂を起せし時高野山へ引入り發心す其子左衛門權佐東照宮御代  
又大機和尚執し申され本知に召出されぬかく阿度までの由緒ある故を以て今  
に蔭田氏と其親しニ不淺となり

井山末寺 但し開山の師及其年歴ハ其村々の條下に出す故此處に畧す

秋雲山天仲庵	賀陽郡井尻野村
大法山善根寺	同 門田村
金剛山法城寺	同 小寺村
二階山報恩寺	同 同 村
自性山本源寺	同 窪木村
神護寺	同 長良村
威徳山眞福寺	同 三手村
一祐山遍照寺	同 大崎村
寶來山蓮花寺	同 門前村
龍雲山報恩寺	同 同 村
報法山長應寺	同 同 村
常福山眞如寺	同 小山村
寶戒山守福寺	同 下足守村
明見山田上寺	同 足守村



巖尾山滿願寺	同	大井村
溪雲山洞泉庵	同	足守村
岩柳山慶久院	同	吉村
金剛山瑞光寺	同	黒尾村
別所山正滿寺	同	兵栗村
如意山安樂寺	同	日羽村
清涼山持泉寺	同	久米村
山宗山歡喜寺	同	下道那草田村
萬安山禪林庵	同	上原村
寶光山瑞松院	同	西園村
安禪寺	同	洞村
如意山稻實寺	同	水内村
安住山天福寺	同	久代村
大賣山地藏院	同	淺口郡連島村
龍吟山梅雲寺	同	同村

天澤山德壽庵	同	同村
大江山潮音寺	同	同村
善福寺	同	大江村
潮音寺	同	連嶋村
遍春庵	同	同村
文珠寺	同	同村
長命寺	同	同村
龍鼓山定光寺	同	西阿知村
安樂院	同	賀陽郡門田村

右天仲庵以下悉く禪宗寶福寺末寺なり

井山末寺敗壞地之寺々是又由緒開山等其村々條に記す

妙善寺	賀陽郡井尻野村
正藏寺	同村
光聚寺	同村
福徳寺	同村







右三ヶ寺ハ當時日蓮宗と成

常寶寺

賀陽郡榎谷村

蓮臺寺

同 吉村

觀音寺

同 大井村

期福寺

同 東阿曾村

右四ヶ寺ハ當時天台宗と成

海雲山傳福寺

賀陽郡東阿曾村

願成寺

同 奥坂村

右二ヶ寺ハ今真言宗と成

井山末寺郡邑寺趾不詳寺々

大義院

修善寺

永福寺

賢福院

弘誓寺

隣松庵

中野庵

以上井山塔頭末寺又末寺或ハ現在し或ハ破壊し或ハ離散し或ハ改宗したる寺々すべて百五十八ヶ寺なり此外百九十ヶ寺ハ歲月久遠なる故寺號遺跡を失ひて記する便なし故闕之

秋葉大権現

天休和尚の時勸請

十境之内北高峯に勸請し國中火難除の守を出す靈

驗あらたにして諸人信仰不淺なり

社殿九尺四方 拜殿二間四方

北高峯 文珠菩薩 備中五ヶの文珠の二也

石井新左衛門墓 井山谷ニ有

秋雲山天仲庵 井山末寺

永祿年中開基 貨谷惠財也

妙善寺

正藏寺

光聚寺

福徳寺

明藏寺

善久芽

右いづれも井山末寺也しが當時破壊して廢寺と成寶福寺記録に出

般若庵 本尊千手觀音丈四尺也當國願禮第廿五番

雪舟禪師之碑詞

井山乃雪舟禪師乃碑波毛余龜山道本伊心乎起志天吉備能國中乃人諸登事謀里豆造立多流爾那母有邪流許例爾其人能有都流事村毛書天止彼道本能云奈留方見類人乃永代爾語繼言續將往多爾之阿禮婆知事母無久拙久劣伎高尚波敢末時止爲互辭備都禮村一二遍能味爾不在遍麻年久乞世流麻々爾々加久那



母禪師波此吉備之遺之中能赤濱村止云所乃民乃布勢屋能小屋乃内爾安禮出豆  
 天雲之向伏限乃畫可伎登所云志人今母所許爾親族乃末乃家在利登叙小田氏  
 爾豆名乎婆等揚登云計利雪舟止聞延志波淡佐麻乃號登云毛能亦備淡齋登母  
 米元山主止毛漁樵齋登母雲谷軒止毛云返留波是母故阿利天可理曾米爾都那  
 多留号爾許蘇幼時爾此寶福寺爾來入利乎里豆弟子止奈里努例村畫可久和射  
 遣乃美好味豆佛書讀事乎母能宇久世之可婆師僧怒里天馬自物繩取附柱爾結  
 豆其日乃暮行爾行天見禮婆阿多利爾鼠走留奈里追返村毛不去都々良々見流  
 爾落流淚遠墨爾可返天足能於與備斯天板敷爾畫加那留鼠爾奈母在家留師僧  
 感豆畫可久事乎免志都曾々母々此人乃畫加久和射爾異久妙爾有都流事婆諸  
 越能遠境爾至利天毛麻佐留倍支人那久豆米豆良加爾見流山川木草叙我師爾  
 在祁流登云比彼國乃王母愛傳貴美禮部院登云殿乃壁爾畫可加勢又富士山田  
 子浦能加多遠可伎多流乎曾許乃物知人抒毛能詩作里天痛久保米都流爾天毛  
 志良延多利可久畫爾余曾利豆波善名乎遠世爾那我佐比奴例抒佛道爾勤之美  
 字半賀斯美悟利深久有志事乎知人無支波禪師乃多米慨久伊伎抒保之幼時爾  
 許曾畫乎能美可伎都禮人止奈理伊傳豆方佛學毛緩意事無久相國寺乃洪德禪

師建長寺能玉隱禪師何登爾從此學備得天寶福寺乃僧主登奈里天婆諸能劣家  
 武僧等乎教伊邪奈比諸越爾豆母佛乃法乎釋明良米高支行爾依天安麻多能僧  
 乃上乃座爾居豆稱乎致之都留婆慶之支事爾安良受也毛文明乃初能年爾諸越  
 由利歸豆波周防國山口乃雲谷寺爾乎利後爾又石見國益田能大喜菴爾移里住  
 美天文龜二年登云年爾身亡努年八十三墓波其菴能垣内爾在里登那母

大雲山觀藏寺

禪宗井山末寺開山の名不詳應永の古記に載せられて尤古刹なれども其由縁傳  
 わらず

財井

名勝者に云井尻村の溝井をいふにはわらずやたから井た、井詞近し歌の意に  
 も能かなひたる所なり是を稻井なりといへる説あれども稻井にはあるべから  
 ずされと兎に角に名所なるごとく國人いへる處也しからば此堰我國にてハこ  
 とニ大なる堰にて國人のたからともふよりしか名付たるものか堰の上なる山  
 を井山といへりろの山に有寺を井山寶福寺といへりたから井といふによしあ  
 るにわらずやこハいとあさなきあげつらひなれと筆のすさみになん



大嘗會和歌集に云

村上天皇天慶九年主基 備中國風俗神歌

たから井 稻春 原本にたかくら井と有今歌によりてあらためつ  
きびの國たからむおきてうゑし田のまづおほにへにおひあくるかも

名勝考二第二の句のたからむをきてハたからむせきての誤なるべし

後冷泉院永承元年十一月十五日主基方備中國

財井

空頭兼文章博士讃岐權介藤原朝臣家經

よろづ世の數にろつまんたからむのなきさもかれす見ゆるしら玉

名勝考に原本に第四句のさの字を落せり今補ひつ

延喜前後眞壁邊新羅の地となりし時ハ今の松山川南と東に流れて其東ハ洪井  
より眞壁井手村清水等へ流し也何れの頃にや東川を堰き留て南川へ流しかけ  
たり是より後草野を開き田畑と成につけて壽永元年妹尾太郎兼康が計らひに  
て福井次郎左衛門奉行し又洪井を堰て水を東へ取事と成是より以來下流に居  
て其恩を蒙らぬものなし實に世の遠慮なり  
井ノ山 此地すべて井といへるか猶別に出せり

巖壘 川島河の東岸に臨めり磐石を壘て松柏遊をなしたり半腹に權現社有て

世人權現嶽といふ延喜式に出せる石壘神社是也といへどもこハ爰より間近き

上秦村に石壘神社あり

又萬葉集に出たる石壘ハさがしき山と知りながら云々といふハ此地にあらず

上秦の石壘にもなしは別は擧たり

洪井用水川幅二丈寛延中石樋を造る長ハ五間 但六尺五寸間

樋口横幅八間下六間内幅上ノ口四尺九寸敷幅四尺五寸高三尺四寸上の堤の間  
敷長ハ三十七間樋ノ上從東以至西二十七間從樋の西至石垣堤六百三十間從樋  
尻岩崎迄五千五百三十六間岩崎より引舟場迄長ハ四千百十七間惣て九千六百  
五十三間尤一丈間也

樋守金井戸村與兵衛と云者代々勤之

此用水ハ加陽窪屋都宇三郡にて十二郷に分水せり

用水方留帳に云壽永元年より同三年此川成ると云時の領主妹尾太郎兼康下知  
として其臣福井三郎左衛門尉奉行して造之云々

秀雄云妹尾太郎が時ハ矢部板倉より南にとつてハ海面にて用水を通る事には不



及只刑部、服部、眞壁、八田部、美簀、三須等に用ひて事足れり十二郷と成、後世の事にて兼康か時にはあらずと云

愚按に和名抄ニ庭妹、撫川、河面、生足、板倉など見へたれば強て用なしとすべからず兼康が時にあらずと云證據も見へねば今極め云にも及ばし只其傳へに従ふて見る人の了簡に任すべし

今水掛り村惣高四萬六千百三石六斗八舛

刑部郷

井尻野二分 門田二分 小寺二分二厘 阿部五厘七毛六

刑部八厘二毛四

眞壁郷

眞壁二分五厘 溝口二分 西郡二分二厘

美簀郷

三和四分 柿木一分二厘二 輕部二分一厘七 小屋二分三厘八

服部郷

溝手四分 窪木四分 長良二分

三須郷

西三須三分三厘五 東三須一分二厘五 今林村と改

八田部郷

八田部五分三厘 清水二分二厘餘 井手二分四厘餘

板倉郷

板倉八厘三毛三 立田八厘三毛三 和井元六分六厘六 中嶋一分六毛一

生足郷

田中三厘三毛九六 福崎六厘六毛六 小山六厘六毛 三手六厘六 高塚同

河面郷

河面三分五厘七毛一二 新庄三分二厘六毛八六 津寺二分八厘五毛七

庭妹郷

東花尻一分五厘七毛 西花尻五厘七毛七三 延友一分二厘五 中田二分四厘二 平野一分三厘九

毛六 川入二分三厘六毛二五

撫川郷

撫川五分 日畑二分二厘八毛三 惣瓜二分七厘五 三田一分餘



深井郷

上庄 下庄 合三分七厘四毛九六 西尾 三分七厘四毛九六 山地 一分六厘六毛七 妹尾 六分六厘六六

大内田 八厘三毛四 山田 一分六厘六六 矢部 一分二厘五

右大概兼康が水路を導として水を引事如是

門田村 刑部郷 吉備國史

高五百八十四石 古ハ井尻野小寺門田福井一村と云

石井關 石井鼻 石井田 此村の西ニ有石井氏先祖より湛井の水を關戸に入れて領所の田へ水を取しといふ今に湛を石井の關とて例となれり

安樂院 建立年代不詳井山末寺にして今ハ小堂に彌陀を安置し善根寺兼帶せり 觀藏寺 井山末寺今廢寺と成て不傳

大法山善根寺 禪宗井山末寺

文永年中玉溪慧珠和尚開基住坊草葺なり

當山に板長サ一尺三四寸計りにして高嶽院殿前備州太夫高岳源山居士 右横ニ 劔峰宗利居士 左ニ學山林正居士 又ニ石川源左衛門尉久式天正三年六月廿六 日家老窪田采女 守安監物倫直同日阿部山に自害すと書たり

秀雄云備中記追加ニ云石川源左衛門尉久式ハ三村元親の妹嫁にて天正三年松山に籠城す毛利家松山を攻元親自害に依て久式ハ阿部山ニ敗し殘兵を集めて爰に屯す毛利の勢又是を攻久式終に友野石見守を召連れ岡谷に遁る窪田采女守安監物ハ阿部山に止り接戦す毛利の兵火を放て坊舎を燒立攻けるに依て窪田守安終に叶はずして自害す依て善根寺に於て吊之けると見へし久式自害の事ハ他卷に出す略之

小寺村 刑部郷 吉備國史不知

高六百五十七石

圓三坊 馬頭觀音

二階山報恩寺 井山末寺 本尊 正觀音

慶長年中惟仲寧和尚開基檀那ハ二階堂大藏太輔山城守政行大永五年也乙酉二月十六日卒法名報恩院 境内ニ中島大炊介元行墓有末葉中嶋氏二軒代々墓有中島大炊介屋敷跡今に子孫相續せり領主より居地免除せらる

片山城 集成志に云二階堂近江守藤原氏行同嫡男加賀守輝行同嫡大炊介元行相續て城主也加賀守ハ永祿年中備前龍ノ口城合戦に後誥して宇喜多の士中吉



與兵衛に討る此時石井新左衛門來りて輝行が首を取返し中吉與兵衛を討取と云夫正十年秀吉毛利と和睦有て此地宇喜多秀家が領地となり城ハ破却しぬと云又天正九年秀吉の固めとして大炊介ハ高松に籠り此城ハ中嶋九左衛門據守す

金剛山法城寺 井山末寺 開基玉溪慧瑠 年代不詳

惣淡寺 井山末寺也しが今ハ廢寺と成たり

清水兄弟及高市之佑墓

古松軒云小寺村の杖郷新田山の内山の神といふ所に在寶曆年中此所の十右衛門といふ山番の者此地に平成石有けるを幸ひの踏石也と穿ち堀けるに下空虛にて塚坑有不思議ニ思ひて内を見るに小高き方石の上に髑髏二ツ恭々敷並べ其前に又骸骨有十右衛門大にあやしみ心をとめて能々見るに前に有骸骨ハ切腹せし体にて太刀を髑髏の下より背骨掛て貫き打伏たる狀にて一身の白骨全く備はり死骸の左に長き刀と矢の根有二百年近くも塚中に有し故に飾ハ悉く朽腐て瓦と變ばかり也此山蔭田侯の家士岡崎勝右衛門某の持分故此由を告る岡崎氏奇異の思ひをなし其儘來りて是を見るに十右衛門がいひしに違わず前

なるハ疑ひもなく殉死の体也石上二ツの髑髏ハ定めて彼が主君の首なるべしと且感し且哀を催ふし古ハ由有人やらんと僧を請し讀經しなせし歸られぬ其後もしや來由を知れる人もやと彼や是に沙汰有けれども知る人もなくて過ぬ後岡崎氏の二男子が藩中某の養子と成此物語せしを委く聞しが安永九年周南文集ニ宗治の像贊を見て忽ち胸霧を散しぬ彼塚中二ツの髑髏ハ清水兄弟の首前なる骸骨ハ高市之佑が死骨成事明けし周南ハ俗稱山縣少介長州萩の儒臣にて皆人知る所なり清水氏又長州萩に在せハ傳記など有て高市之佑が殉死の始終を文章に加へしならん宗治の子幼稚にて鬪諍の岐より薺州に下向し打續き騒亂せし世なりけれハ墳墓の土地知らざるもことわり也今長州清水氏此事跡を聞給はハ大功義祖の古墳其靈も厚く祭らるべきものをとおぼゆるなり

周南文集ニ云

高松城主清水君宗治像贊并序

高松之役豊衆号二十萬君將數千兵據彈丸城當之不啻山岳之壓卯百萬攻之不克百計招之不降既而引水灌之環城爲湖幾沒矣及和議興身死滿豐王之志以濟一城之命戒三國之好其處死也從容愉適歌且舞如未嘗知死者爲矣哉清水君之爲將也雖



古詩書之教乎無以尚焉君就死舟中一時衆皆欲從之君喻以大義不允唯監軍末近左衛門尉信賀君庶兄月清及家人難波傳兵衛主履七郎二郎月清主殿餘十郎與死實天正十年六月四日也高市之佑函首歛屍從容畢事臨穴自頸白井餘三右衛門尉治嘉先死試自屠之不難屬城師林三郎左衛門尉重真守冠山城先高松而沒死之皆百夫之雄也

贊曰

君降耶山陽列城瓦解君不死耶一城生靈魚蟹嗚呼死也輕于鴻毛重泰山矣桓々軍容儼然如在

高市之佑函首歛屍從容畢事臨穴自頸と有を以て考へ見るに割符を合るがことく疑ひもなき清水兄弟が古墳なる事を知る思はざるに此事跡顯れたるも又奇といふべし

小寺要害兵亂記ニ大内尼子を征せんと天文十一年七月雲州へ發向す二階堂氏行野山三村以下當國の人々彼國に向ひしかハ其留主を伺ひ播州の赤松晴政先經山の城を攻んと刑部に陣を取經山にハ氏行留主なれば其子新左衛門輝行楯籠る小寺の要害にハ中嶋左京同與介同喜十郎湯淺九郎兵衛順宮二郎左衛門真壁

藤兵衛橋本權七那須與六橋本市介鷲見十兵衛近藤新介國府與三兵衛等に農民三百餘人三方の橋を落し城門を戸さし今や寄すると構へたり斯る處へ京都より赤松上洛すべしと申下しける間一矢合もせて陣拂ひす經山より此体を見て敵ハ退くや一當あて、見よと追しとよて討せければ赤松方の後殿岡本權之丞宇喜多内藏中吉平兵衛等ふヨ止まり戦ふて終に二階堂に討れにけり此間に諸勢引退きしかハ戦ひも是まで也と勝軍してこなたの勢も退きけり

中嶋大炊介元行宅跡今畑の中ニ祇園午頭天王祠有

妙見大菩薩 傳へに云二階堂政行鎌倉より守護し來て此地に安置すと云山林中

嶋氏免地の内とて 本社 拜殿

社僧 二階山 報恩寺

山神糺祠

祭神大山祇命 境内除地四十間ニ十八間本社二尺四方

祇園午頭天王糺祠

中嶋氏攝之

正等山等覺寺來迎院



眞言宗本寺國分寺本尊觀音堂一圓半 住坊東西九間南北二間境内十九間ニ二十

開 鎮守 荒神

廢寺 仲ノ寺 本坊舊地不詳

片山 小山なり峰に城の壇取残れり永祿年中尼子勢片山の砦を攻む城主中嶋大炊介元行防戦せし事別に出しつ

中嶋氏譜 中嶋二階堂氏の事黒尾村經山城の條に出しつべし

中嶋新左衛門代々備中の國に居住し加陽郡の内三千貫を領し小寺村片山城に住す毛利元就の幕下にて當國の侍大將庄伊豆守同兵部太輔等尼子に一味し雲州に先陣して國中毛利の城々攻取勢ひに乗つて中嶋が片山の城へも押寄しを新左衛門等防戦して尼子勢を追崩し數百人を討取けれハ毛利より加増賜わり感狀等今に彼家に持傳へぬ其後備中侍大將彌屋七郎兵衛藥師寺彌五郎備前龍の口城を守りける時宇喜多和泉守松田左近將監伊賀左衛門尉等其外備前國の侍ども龍の口を取卷けれハ當國よりも加勢の兵馳行内外より相圖を定めて切て出敵數十人討取立退ける此時毛利より彌屋氏へ感狀賜はり今ニ彼の子孫の家を持傳ふよし其頃備前妙善寺に於て宇喜多直家と備中侍等相戦ひけるに石

川左衛尉中島加賀守新左衛門 彌屋七郎兵衛等戦死し此外五百餘人討死す加賀守が子新左衛門ハ父輝行か家督を繼て大炊介元行と改名し舊領三千五百貫に又千貫の加増ニて都合四千五百貫の地を領し黒尾村經山の城及小寺村片山城を守る天正二年當國松山の城主三村修理進元親織田信長公へ御味方として國中所々の城に楯籠りけれハ毛利輝元小早川隆景備中へ出馬あり三村が城々を攻給ふ時中島元行案内者として數度戦功を顯はし又千貫の地を加へ給ふ天正六年輝元隆景播州上月の城を攻給ふ時に織田信忠羽柴秀吉後詰として戦陣有し時清水長左衛門中島大炊介當國の勢八千を以て水の手へ押寄水筋を堀切城中難儀に及ぶ尼子勝久切腹して山中鹿之助も降人となり毛利家勝利を得られ歸陣し賜ひし路隆景高松經山高山等に立寄賜ひ多年の軍功今度の忠戦比類なきよしにて感狀を下され其上半國の侍ハ清水長左衛門組下ニ申付られ高松城守護となり半國をハ中島大炊介組下ニなされ高山の守護となる天正七年備前國の宇喜多直家信長へ内通して毛利に叛きしかば境目にて度々相働き高名を顯はし小早川隆景毛利元清より感書數通今に彼子孫に傳ふと云天正十年毛利退治として織田信長公陣代御次丸羽柴秀吉等備中へ出陣し賜ひければ押へとし



て高松城に清水長左衛門四千貳百餘人中嶋大炊介ハ長左衛門が甥其上輩なりければ四千餘人にて同所二の丸へ籠り堅固に持抱し内秀吉公水攻の奇計にて清水宗治兄弟切腹して諸士の命に代り東西和睦有大炊介ハ吉川小早川の指麾に依て存命し高松城を黒田官兵衛杉原七郎右衛門へ相渡し城々仕置ハ其まゝに毛利家御頼ニにて秀吉ハ上洛し給ひしかば國中の仕置すべて毛利元清並中島大炊介ニ申付られぬ大炊介ハ高松二の丸番丘の出崎を持堅め居ける又大炊介が弟九右衛門ハ小寺を持堅めしが秀吉の勢と戦ひて能拒ぎしかハ輝元隆景より刑部郷三千貳百貫加増有すべて七百貫の地を領す秀吉公天下をしるしめされて後當國高橋川より以東を峰須賀彦右衛門黒田官兵衛へ毛利家より相渡され宇喜多直家に下されしかば清水中島等が居城も宇喜多家に渡し給ふ時黒田官兵衛秀吉の命として吉川治部少輔へ申されけるハ中島大炊介清水源三郎ハ召出さるべきよし傳へ給ふ大炊介源三郎申けるハ如何様にも毛利家にて仕官致し可申様黒田氏へ執成頼參らすなりと承引せず其後輝元申されけるハ大炊介源三郎に知行遣はし度思へども秀吉公の命に背きたる恐れ有とて貳百人扶持づゝあたへ給ふ隆景筑前に封せられ給ふ時中島大炊介清水源三郎筑前へ

罷越可申よし命せられ百五十人扶持下され外ニ銀子を賜はりぬ又源三郎中島又十郎に合力分として小知を賜はり備中より呼抱へられ候侍どもを兩人の與方に属せられける朝鮮御陣の時隆景彼地に押渡り大明加勢の大軍と戦ひし時隆景左備へ粟屋四郎兵衛右備へ井上五郎兵衛清水五郎左衛門源三郎中島治右衛門又十郎相備へにて大明の軍を切崩し大に勝利を得此時戦功の争ひ有たるを秀吉公肥前名護屋にて御糺し有粟屋井上中島清水へ同文の感狀を賜ふ清水五郎左衛門中島治右衛門ハ其後隆景死去し給ひ秀俊卿家督仰付られし時伏見へ召出され秀吉公へまみへ奉り御朱印を下され斯て大炊介ハ御暇を申備中へ歸りたりければ秀俊代替りに退きたるを秀吉憤らせ給ひ在所へ蟄居すべきよし山口立番頭にて申渡され依て大炊介治右衛門本國に籠居いたし居けるに宇喜多秀家へ御下知せられ小寺村中島居城の跡御免地に被成大炊介惣領治右衛門と義絶して二男宇右衛門を大炊介惣領に致しける後秀就卿より大炊介周防へ参候様にと清水美作中島筑後迎ひに参りやがて同道して周防國へ下り秀就卿へ目見へし中國兵亂高松の有様など秀就卿御尋ければ數日物語いたし祐筆に仰せて記録せしめらる其頃中島宇右衛門呼出されけるが何か不足の事有て退去し



備中に引籠りぬ大炊介ハ懇に仰讓りぬ周防に止りて終に彼國にて卒す宇右衛門女子壹人有て男子なかりけれハ同國福屋七郎兵衛實ハ大炊介諱にて有けれハ彼が二男與介ハ大炊介が爲には孫にて宇右衛門にハ甥なる故養子として女に娶合せぬ此與介も病者にて引籠り居領主蔭田家より除地有て浪人にて始終小寺村に住居す

武家高名記二階堂大藏少輔政行備中國淺口郡を領して中島村に居住し仍て爲中島氏

二階堂氏ハ永正八年將軍義植公に属して城州舟岡山合戦に忠職を勵し其名高し天文五年尼子經久晴久安藝國に發向し毛利元就の居城吉田郡山の城を攻軍利なくして敗軍に及ぶ時ニ二階堂近江守六千餘騎を率して横田大坂峠に相戦ひ勝利を得たり其時大内義隆の感狀に云

今度雲州勢藝州發向之節横田大坂峠へ出張尼子勢兵糧通路被取切剩歸陣之節晴久旗本被切崩首百七十貳到來無二之忠義無比類候一手之銘々粉骨之段開届候彌忠節可爲肝要候恐惶謹言

二月十八日

義隆花押

二階堂近江守殿

弘治二年三月毛利元就防州發向大内義隆陶五郎内藤下野守退治の時感狀ニ曰此度逆臣陶一類令退治節早速下向所々忠職可奉七開候嫡男新左衛門尉當國在國爲飼領豊田郡之内舟木村菟路村眞良村佛通寺村爲戦功賞令扶助候向後彌忠節頼入候恐々謹言

四月廿四日

元就花押

二階堂近江守殿

中島加賀守輝行ハ二階堂近江守が嫡男也永祿年中雲州在陣の時馬瀨原の合戦ニ尼子方の先陣立原源太兵衛ニ鎗を合せ高名す同九年十一月尼子義久終ニ降人と成て富田の城を明去ル元就陣中ニ有降伏此時加賀守息新左衛門を爲城番被留置時の感狀ニ曰

今度當國速ニ退治之事累年各無二心被遂忠職相達本懷殊ニ嫡男新左衛門尉富田月山之城爲在番留置候仍爲飼領仁田郡之内竹崎村原田村板根村令扶持候向後忠節頼入候恐々謹言

永祿九年十一月十八日

元就花押



中嶋加賀守殿

私ニ曰此合戦ハ元祿三年之事か加賀守ハ此節備前にて討死大炊介家督の後  
なり不審なり

竹井惣左衛門愁訴之返書

對中嶋大炊介被仰越愁訴之趣一々令分別取帶等任望進俟行之儀無相違可被相  
證候於其上者御身上之義不及申長久無別ニ可申談候若此旨於偽者可能蒙日本國  
中大小之神祇殊ニ當國一宮八幡大菩薩天滿大自在天神御討者也仍而神文如件

天正三年五月二日

小早川 隆景 花押

福原出羽守貞俊 花押

下野守 通良 花押

竹井惣左衛門尉殿

中嶋氏家系

家紋龜甲の内ニツ引兩 同花菱 五三桐

或云中嶋玄印ノ末葉ハ龜甲花菱紋ト云

天兒屋根命二十一代中臣御食子長子

大織冠鎌足

正三位内大臣改中臣姓始賜  
朝臣姓母ハ天伴久比子嫡女

不比等

左大臣從二位  
陸日滿海公

武智磨

乙磨

是公

維友

正二位  
左大臣

參議

少納言

正二位  
大納言

弟阿

高扶

維幾

從五位下  
越前守

從五位下  
陸奥守

從五位下  
彈正大臣

爲憲

時理

時信

從五位下  
守始鏡二階堂

從五位下  
三河守

駿河守

維永

狩野、工藤、伊藤、  
曾我等之祖也



維遠

二階堂遠江守  
從五位下

維兼

從五位下  
遠江守

維行

駿河守、遠江守  
從五位下

行遠

從五位下  
遠江守

行政

山城守  
從五位下

行村

隱岐守法名行四二  
階堂補流仕鎌倉

行光

借波守

行盛

彈正忠下  
從五位下

行泰

民部大輔判官  
從五位下筑前守

時光

下野守

行光

下野守

行春

駿河守

政行

始政光三郎右衛門大藏少輔政行天永五年二月十六日卒 法名報恩院神君其雄或云永正中經山ノ城主ナリト云

氏行

始孫七郎近江守從五位下永正六年六月經補將軍ノ命ニ依テ父ト共ニ備中ニ來リ住テ淺口郡片島城母宅而氏  
法名勝興院

輝行

中島新左衛門從五位上加賀守爲毛利幕下於中國政度顯元功備前國龍ノ口合戰爲守喜多家士中吉與兵衛被討時ニテ  
非新左衛門當敵中吉ヲ討取輝行力首ヲ返シ葬之法名相談院見外宗信建一寺謂之相談寺母ハ石川左衛門久治女

女子

彌屋七郎兵衛室

元行

中嶋新左衛門大炊介室ハ清水長左衛門宗治女母ハ清水備後守宗則妹法名清光院、中國兵亂戰功アリ後周防國ニテ  
卒防州一向寺ニ子孫有ト云、入道シテ號行秀法名觀藏院一寺ヲ建テ号觀藏院、加陽郡刑部郷經山城主又小寺ノ要  
害ヲ拒守ス

女子

日橋六郎兵衛室



女子

伊勢兵庫介定勝

某

中嶋九右衛門  
長州ニテ卒ス

行吉

中嶋右京

行義

行光

中嶋右衛門實ハ行義二男母ハ赤木兵法名本空了源越前少將近士

某

中嶋勘十郎右衛門後清水  
美作清水右衛門尉行宗養子

女子

福屋七郎兵衛輝  
光室

某

中嶋彦三郎後筑  
後明石兵部養子

女子

日幡六郎兵衛室

昌行

中嶋宇右衛門實行發嫡子祖父元行養子  
妻ハ明石飛彈守女法名機岳行善居士

行佐

中嶋與介實ハ福屋七郎兵衛次男室ハ昌行女也

女子

中嶋行佐室

某

中嶋九右衛門

某

中嶋治大夫  
父與助

二階堂中島ノ子孫小寺村ニ住す庶流中島ト稱スル者多シ

中嶋大炊介と云人同時代備前の國にも又同姓名の人有と云。集成志に備前國上道郡中嶋村城主中島筑前守の子大炊介代々中島村及赤坂郡麻村備中の内をも領知す備中松山三村家親幕下ニ成家親宇喜多が爲に討れ其後三村が持城深田妙善



寺に宇喜多攻寄に依り三村元親等救之大炊介もまた援兵し永祿七年六月十二日爲宇喜多討死す子孫今に中嶋村に住す其後を中嶋源太郎と云 東照宮の廟岡山に勘請して祭禮の御太刀を持事巾嶋氏代々の役也持高五石免除と云

備中の中嶋大炊介ハ永祿七年迄新左衛門と云又加賀守と共に妙善寺合戦に出陣し加賀守ハ討死し此時備前の中嶋大炊介も討死す此後新左衛門家督を繼て大炊介元行と改む依之一名二人なる事を知へし

中嶋大炊介領地

新山 黒尾 新田 久米 井尻 阿武 井山 澁井 井尻野 淺尾 門田 小寺

又藝州へ働きし時飼料として豊田郡の内 船木村 佛通寺村 萩路村 眞尾村 以上四ヶ村を賜ふ

又備中庄伊豆守退治の戦功として

又尼子退治の後仁多郡の内 竹崎村 板根村 二村を賜ふ

又天正三年三村退治の功として三村跡地三千貫御加増なり

明現宮

中島元行居城片山の鎮守なり今に元行か子孫氏神とて崇祀すといふ

乙麻呂十一代駿河守維遠五代 二階堂

行政

從五位下 主附九

三男

行政

正五位下出 羽守入道

行政

從五位下文永二年六月引付案ニ加ヘラレ同七年評定案弘安七年四月出家法名道證正應五年卒ス年五十一

行政

常陸介

行政

近江守 建治三年卒

行政

二階堂備 中三郎

行政

從五位上出羽守正安三年八月出家道曉乾元元年八月廿七日卒五十七

行政

從五位下備中守正應三年八月出家武家經林山

行政

從五位上備中守元弘四年十月出家長祐



評定傳二

備中二階堂行藤と有又此一族惣て備中守ニ受領したれば當國の守なりし様おもむる

二階堂近江守 備中兵亂記ニ天文九年八月尼子晴久三吉備後が居城備後國比叡尾の城へ押寄云々備中にて大内が侍大將一手ハ二階堂近江守井三村野山赤木上野以下六千餘騎備後東條雲州横田大坂峠ニ要害を構へ難所に敵を待受たりかくて九月二日尼子が陣へ夜討を掛不思議鬨をせつと作りて打入ければ尼子勢不意を討れ故々に敗走しけるを東條と横田の境目ニ待居たる備中勢晴久の旗本目かけ切て掛りければ引立たる敵の一さ、へもさ、へハころ無道山谷川のゑらびなく右往左往に逃散ける

同書ニ云弘治元年十月毛利元就逆臣大内義長陶隆房が籠りたる若山城を取圍むと聞しかば備中の侍大將三村修理進二階堂近江守石川清水上野細川以下都合壹萬餘騎相隨へ加勢として石見の國へ下着す元就對面有て遙々の下向をねざらひ去にても在國へ赤松尼子細川三好の者ども争戰の境目なれば歸陣して守らるべしといふ諸將答へて義興以來厚恩報謝し難く候へハ責てハ吊戰の御

供に候し逆臣殘黨に一筋弓射たころ存ト候へ先陣に加へ賜はらハ大望たるべし在國の城々ハ皆手配り能構へ置ぬよしいひければさらばとて大戸善左衛門尉相備へに定めらるやがて周防長門の國にて若山松崎石田岳勝山等の城攻氷上曠の合戰に各粉骨を盡し終に大内義長陶隆房等を亡失しかば元就諸將の軍功を感せられ三村二階堂其外の人々へ各戰功の賞を予行はれける

備中兵亂記云元龜元年備前津高郡金川の城主松田左近將監ハ石川源右衛門尉三村修理中島大炊介宇梯市兵衛を差越浦上宗景と年來境を争ひし處浮田和泉守と謀縁者のため謀の使近月働來べく用意ニ候自今藝州の幕下に屬し度候自然の時ハ御加勢下され候様に取持賜はるべしといひて宇梯市郎兵衛ハ人質のこどくに止りけり

備中兵亂記天文十年七月尼子晴久毛利元就が藝州吉田の城を取巻二階堂近江守はトめ石川高橋清水以下穂田が猿掛城に籠り關ヶ鼻を切塞ぎて尼子が兵糧の道をとゞむか、りしかば晴久數日の對陣叶はずして終に雲州に引退く

此條幸山石川傳にくわし

經山城 黒尾の所に出すべし



備中志加陽郡卷之十五

福井村 刑部郷 吉備國史同斷

高六百九十六石

延友村

高七百石

延友村

庭瀬郷

吉備國史高七百二十七石

高廿七石壹斗壹升貳合

庭瀬領と蒔田知行二村を合せし高成へし

平野村

庭瀬郷

吉備國史千九百九十貳石

但平野両村高也

高七百石

平野

庭瀬郷

高九百九十四石九斗九升壹合

庭瀬郷

妹尾太郎兼康住居す

松林寺

圓光大師開基

本山恵日山莊嚴院の末派

日本惣國風土記第四十七備中國殘缺云

庭世郷



土地中農民用不少出良材佳菓時々出異鳥等

公穀百二十九

假粟五十九

以下虫食不明二字也

中田村 廣備國史八百四十八石

高八百十六石四斗貳升三合

元祿十四年改帳ニハ昔のごとく庭瀬村と有いつれの頃にや今中田村と改む

正保四年改帳ニ庭瀬より備前堺迄二十町五十間

庭瀬橋長七間幅一間半深サ二尺

庭瀬より延友村舟場迄二十二町川の廣サ四十五間潮差引有今の地形とは少し異也

庭瀬城天正十四年岡豊前守拵たり真顯記にハ庭瀬城へ毛利氏が勢籠りて戦

本事書たれ共偽也

庭瀬より高松へ一里三十七町十九間

廣榮山不變院

日蓮宗安房國小湊誕生寺の末寺也 寺中四院有 即曰 中正院 本了院 正

善院 大乘院 俗名長國山 松山寺ト云 亦末寺七ヶ寺有 即曰 淨泉寺 山田村 受法寺 山田村 淨

安寺 日輪村 妙傳寺 東花尻村 立成寺 同村 正法寺 四花尻村 了性寺 光田村 當時開基不

詳往古天台宗にて廣榮山長國寺と号し八幡山の側に有しを天正十四年宇喜多

秀家の臣岡豊前守庭瀬今の新開地へ移す以日長大徳爲開祖其頃花尻村堺に小

山有是則八幡山千佛堂の舊跡也大覺僧正御通行之始也其後亂世打續き無住多

かりしと予或書ニ開基亦松祐心と云人也といふ慶長中庭瀬城主戸川土佐守正

安日蓮宗歸依に依て改宗し賜ふに付其父肥後守達安の法名をとりて當寺を不

變院と改 此時ハ京都妙覺寺なり 時に住僧日長二代目日鳳と相續す其後無住にて妹尾盛隆寺

兼帶也 不變院棟札にハ日長聖人と有

長國山松山寺大乘院 不變院寺中也

開基不詳八幡山千佛堂の側に有て長國山松山寺と号す不變院庭瀬に移りて跡

に松山寺一字残り當時無住多く盜難しばしば也ければ不變院より坊守を付

置しか天正十四年又不變院の側に移して寺中と成領主戸川土佐守の命に依て

改宗せしめ大乘院と號



清水山松林寺 祖宗

永正六年古記ニ曰古ハ高藏寺と云都宇郡中ノ庄栗坂村ニ有文祿三年八月栗坂村にて五百六十四石七畝廿五歩の地を賜りしと云寺内伊勢皇太神宮の社有開山別峰和尚古記ニ曰圓光國師示寂之三年ニ門人以其行實託朝貢人詣予求記之乃記曰師法諱大殊字別峯ト云周防人也楊岐相傳十四世東福寺五代嫡孫南山四傳之眞子即吾靈岳翁之嗣也

元祿十五年高峯士恪和尚板倉越中守重高ノ召ニ應ズ是中興開山なり延寶の頃清水山松林寺と改號す井山象海和尚の弟子毫山和尚より十代相續す其法系ニ曰

○靈岳——別峯——

南山

殊山

高峯士恪

建武二年遷化

應永廿三年遷化

名不知

元祿ノ頃

其後亂世打續て無住にて法嗣不詳寛永年中中興の人有りて相受す此寺栗坂村より長野に移しける故ニ今も鎮守の社残り又應永十一年十月南禪寺住一隣が書の中ニ門前ニ海有て龍神の事を書載たり然れば應永の頃ハ海にて其地形も大ニ沿革せりと見へし

法正山信城寺 日蓮宗

戸川家の證號信城院殿の位牌有

伊勢皇大神宮 松林寺鎮守 本社 前殿 石鳥居 寺内ニ有

永徳二年十二月二十日鼓山大隨法諱別峯周防人也の記ニ曰永徳二年春正月十五日始參詣

伊勢大神宮偶居蓮臺寺數月茲槍垣大長官貞尙五代孫彌宜貞昌天照皇太神夢告

曰上人付我稱袈裟アル也依以是與蓮臺寺別峯和尚焉貞尙夢醒而驚以六月三日

送袈裟別峯和尚不辭留之中略八月二日再參詣大神宮于時從外宮白蛇來歸屈

和尚袈裟下長官拜稽首久接和尚詣内殿棄和尚願力顯示法護人相聊不忘靈

山付屬人々見神明靈驗之新愈作怪奇絶特之念斯和尚念誦了自内殿出去白蛇

亦入大宮之中中略臨濟備州定林成叢林其年八月泊然化光通寺余記其類之方

一而已故詳其語以告後之人可其人

右社永徳二年十二月廿日 鼓山大隨記

畫像を四尺計の板に張付神體として今に内陣に安す 本社 拜殿 石鳥居

八幡大菩薩祭願八月十五日

石清水と云男山より勸請せし故也長國寺開基赤松祐心と云者遷して祭れり此



八幡山千佛堂舊跡不詳 本社 幣殿 拜殿 隨神門 石鳥居  
社僧長國山大乘院 禰宜

庭瀬の産五兵衛といへる者、後阿山中之町三門屋孫兵衛といへるに養子になり寛政元年初冬の頃國清寺門前を過けるに鼻紙袋道に捨て有りしかばい成者の落せしにや要用の物もあらんいかにも落せし者に渡し度也とおもひ兼て國老土倉氏の藏中仕を勤めしか、其頭役の者へ携へ行てかゝる事にて拾ひ侍りぬ何卒落せし者へ返し度事也といへ、頭役の者も其志しの清白なるを感嘆しいかにも其中を改めば落せし者の名も知候はんとて開き見ければ京都何某といへる名書も有ければ旅客の宿せし家々を問極めて其主へ渡しぬれば其潔き志を大に感し酒肴など携へて篤く謝しければ固く辭して受ず其由頭役の者聞傳へて篤き志しにて送り物を空敷するも本意なければとて強て受させぬ土倉氏にも其潔きを聞て大に賞譽有て青銅など與へられしと云五郎兵衛人と成て正敷者にて養父母に仕へて孝心厚く萬の事心を盡して孝養し父久しく病ければ看病も力を盡し其病の早く治せん事を日々蓮昌寺といへる道場へ久々詣て祈念しけると云常の操廉直にして其役をも忠貞に能務め孝心厚き事を褒

揚有て俵米壹口を土倉氏與へられしと云、る行状とも公廳に達しければ青銅若干を賜はりて其美德を顯はし申へし

庭瀬城跡

集成志に加陽郡本城にて都宇郡の堺、昔の外堀なりと云

毛利より井上豊後守有景を籠ら中島紀に天正八年宇喜多直家攻寄合殿の事見ゆ

天正十年秀吉の勢を引詰堅固に籠城して秀吉も嘆賞せられしと云其後戸川肥後守安宣、久世大和守重之、天和三年八月加陽窪屋、淺口、小田、後月五郡之内を賜ひ貞享三年正月加陽、小田、後月三郡を轉して丹波の國乘田、船井、多記、氷上四郡の内に移され龜山城を賜ふ松平山城守信道、元祿六年小田、加陽、都宇三郡の内にて壹萬石を賜同十年九月出羽の國村上郡上ノ山城を築て彼地を賜ふ元祿十二年二月より板倉越中守重高以後今に居住し賜ふ

井上豊後守口口之事

初毛利に屬し中頃故有て尼子に隨順せしが後また毛利に歸屬せり天文九年十月尼子勢郡山城を圍む尼子式部太輔同左衛門太夫大將にて雲伯石の勢一萬餘吉田郷中の民屋とも悉く放火して足輕を出し敵か、れとおびきたり中興元就